

南相馬市文化財調査報告書 第1集  
南相馬市の歴史ある建物 1

2012-2016



南相馬市文化財調査報告書 第1集

# 南相馬市の歴史ある建物 1

---

2012-2016

# はじめに

## 歴史ある「まち」、南相馬

福島県太平洋側の浜通り地方北部は相馬地方と称される。その相馬地方南部に当たる南相馬市は小高町、鹿島町、原町市の1市2町が平成18年（2006）1月に合併して誕生した。旧市町名は市内を区分する区名として継承され、その歴史性を今に伝えている。

この南相馬市を全国的に最も知らしめているのは、武家文化を今に伝え、中世以来当地方を治めた相馬氏に関わる伝統行事「相馬野馬追」である。また、桜井古墳など福島県内で最も多い8件の国史跡があり、本市は福島県を代表する歴史ある「まち」と言える。

## 地形、環境に形作られる歴史性と「まち」

相馬地方は東北地方としては雪が少なく温暖な地域である。西にそびえる阿武隈山地から太平洋に向けて小河川が東流し、その河川の周囲には丘陵・段丘が樹枝状に分布する。河川下流域には小さな沖積地が広がる地形を呈している。

古墳時代以降、この小河川ごとにまとまりが認められ、近代以降は地域を南北に貫く街道、鉄道の影響を受け、独自の発展を見せながらも、規模としては比較的等質な「まち」がまとまりごとに作られていった。

## 東日本大震災と福島第一原子力発電所事故

平成23年（2011）3月11日は南相馬市にとって忘れられない日である。津波・地震による犠牲者は福島県最大の636人（平成29年3月現在）、津波・地震による沿岸部の被害は目を覆うばかりであった。加えて福島第一原子力発電所事故により地域は大きな混乱に陥った。このことは市内の震災関連死が489人（同上）に及ぶことが何よりも物語る。

また、原子力発電所事故の警戒区域として約1年間立入禁止だった小高区などの地域は、避難指示期間が5年4か月にも及び、多くの住民が帰還していないなど現在も大きな課題を抱えている。

## 朝日座からはじまった震災後の取り組み

震災後、大正期の芝居小屋兼映画館である朝日座（原町区大町）の活用を図る朝日座を楽しむ会は、地域の文化活動が少なかったことからいち早く活動を再開させた。この活動の過程で朝日座を楽しむ会と歴史的建造物の専門家とのつながりができ、朝日座の建物修理と調査が動き出した。このことにより、朝日座は相馬地方では初めての国登録有形文化財に登録された。

# はじめに

## 歴史ある「まち」、南相馬

福島県太平洋側の浜通り地方北部は相馬地方と称される。その相馬地方南部に当たる南相馬市は小高町、鹿島町、原町市の1市2町が平成18年（2006）1月に合併して誕生した。旧市町名は市内を区分する区名として継承され、その歴史性を今に伝えている。

この南相馬市を全国的に最も知らしめているのは、武家文化を今に伝え、中世以来当地方を治めた相馬氏に関わる伝統行事「相馬野馬追」である。また、桜井古墳など福島県内で最も多い8件の国史跡があり、本市は福島県を代表する歴史ある「まち」と言える。

## 地形、環境に形作られる歴史性と「まち」

相馬地方は東北地方としては雪が少なく温暖な地域である。西にそびえる阿武隈山地から太平洋に向けて小河川が東流し、その河川の周囲には丘陵・段丘が樹枝状に分布する。河川下流域には小さな沖積地が広がる地形を呈している。

古墳時代以降、この小河川ごとにまとまりが認められ、近代以降は地域を南北に貫く街道、鉄道の影響を受け、独自の発展を見せながらも、規模としては比較的等質な「まち」がまとまりごとに作られていった。

## 東日本大震災と福島第一原子力発電所事故

平成23年（2011）3月11日は南相馬市にとって忘れられない日である。津波・地震による犠牲者は福島県最大の636人（平成29年3月現在）、津波・地震による沿岸部の被害は目を覆うばかりであった。加えて福島第一原子力発電所事故により地域は大きな混乱に陥った。このことは市内の震災関連死が489人（同上）に及ぶことが何よりも物語る。

また、原子力発電所事故の警戒区域として約1年間立入禁止だった小高区などの地域は、避難指示期間が5年4か月にも及び、多くの住民が帰還していないなど現在も大きな課題を抱えている。

## 朝日座からはじまった震災後の取り組み

震災後、大正期の芝居小屋兼映画館である朝日座（原町区大町）の活用を図る朝日座を楽しむ会は、地域の文化活動が少なかったことからいち早く活動を再開させた。この活動の過程で朝日座を楽しむ会と歴史的建造物の専門家とのつながりができ、朝日座の建物修理と調査が動き出した。このことにより、朝日座は相馬地方では初めての国登録有形文化財に登録された。

## 歴史ある建物の調査

この朝日座の取り組みを契機として、震災により多くの建物が解体されてしまうという危機感があったことから、本格的な建造物の分布調査が行われた。調査により、自然豊かな街道沿いにある大谷家住宅（鹿島区柄窪）、大正期の洋風建築である小林眼科医院（原町区南町）、近代モダニズム建築である相馬絹業協同組合事務所（小高区関場）など、これまでにはあまり意識されていなかった歴史ある個性的な建物が各地区で専門家の目を通して発見された。また、調査成果が保存につながった代表的なものとして、大谷家住宅東蔵・中蔵・門の登録有形文化財への登録があげられる。

## 記録するということ

一方、調査を進めていく中で、保存が困難である事例にも多く触れることとなった。調査前に解体を迎えてしまっていたものも少なくはない。

また、調査では必然的に所有者や建物に関わる地域住民の声を聞くこととなる。大切にしてきたものを壊すことを調査者に語ることで気持ちの整理をつけようとする人、逆に調査が入ることで改めて思い直し保存へ進もうとする人もある。

本書は、調査者がこのような声を聞き、それぞれの課題と対面しつつ、歴史ある建物に魅せられながら一喜一憂して進めてきた調査の記録の一部である。この記録を通して南相馬市の歴史性、地域性を感じることができれば、この調査も意義あるものであったと考えたい。また、本書が南相馬市の新たな活動の一助となれば、所有者など調査に協力いただいた方々も喜ばれることと思われる。

南相馬市教育委員会文化財課



## 例 言

1. 本報告書は、平成 23 年度から 28 年度にかけて南相馬市教育委員会、南相馬市文化遺産を活かした復興まちづくり実行委員会、朝日座を楽しむ会が実施した建造物調査の成果報告書である。
2. 本報告書に掲載される調査にかかる経費は、南相馬市教育委員会によるものほか、南相馬市文化遺産を活かした復興まちづくり実行委員会が実施した平成 26・27 年度文化遺産を活かした地域活性化事業補助金（文化庁）、並びに朝日座を楽しむ会が実施した公益信託 大成建設自然・歴史環境基金の助成によるものである。
3. 本報告書刊行にかかる事務局  
南相馬市教育委員会文化財課文化財係  
教育長 阿部貞康  
事務局長 木村浩之  
文化財課長 堀耕平  
文化財係長 川田強  
主査 佐藤友之  
主任文化財主事 荒淑人  
主任文化財主事 藤木海  
主任文化財主事 佐川久  
主査 林鉾太郎
4. 調査担当（所属は調査時）  
堀耕平、川田強、佐藤友之、荒淑人、藤木海、佐川久、林鉾太郎、濱須脩（南相馬市教育委員会文化財課）二本松文雄、二上文彦（南相馬市博物館）大野勝幸 小松妙子 道家祥平 三浦晶恵 安富啓 和田裕子（マヌ都市建築研究所、以下マヌ。）小林直弘（東京藝術大学） 金出ミチル
5. 写真や挿図は、各章執筆者の撮影・作成による。これ以外については必要に応じて特記する。調査担当者以外が所蔵する写真・史料については、キャプション中に示す。
6. ご協力いただいた方々（敬称略）  
【個人】 佐藤孝子 廣畠裕子  
安部幹洋 末永豊明 布川雄幸  
小畑瓊子 高島綱代 布川和子  
賀古唯義 高島敬一郎 二上英朗  
刈田博 高橋紀子 二上裕嗣  
菊地進 高橋美加子 星野良美  
日下邦弘 高平大輔 益邑明伸  
窪田アヤ 狩内正和 三浦藤夫  
小林和貴 但野守 八島征彦  
小林嵩 西和彦 山城雅昭  
齋藤栄蔵 西岡聰 李美沙  
齋藤良介 平木和夫
- 【組織】 朝日座を楽しむ会 朝日座を楽しむ会青年部 石川建設工業（株） 小高区文化祭執行委員会 小高地域構想ワーキンググループ小高復興デザインセンター おだかぶらっとほーむ 小高の歩みたんがく会 開場建設（株） 福島県教育庁文化財課 文化庁文化財部 まなびあい南相馬 南相馬市文化遺産を活かした復興まちづくり実行委員会 南相馬市役所小高区役所
7. 本書の作成  
執筆（執筆順）：  
川田強／はじめに、第 2 章「小高思ひ出かふえ」、第 3 章「小高の綱織物業」  
和田裕子／第 1 章 朝日座  
金出ミチル／第 2 章 高島家住宅、第 3 章 相馬綱業協同組合  
編集：金出ミチル  
図面作成：（凡例 [敷] 敷地配置図、[平] 平面図）  
第 1 章 朝日座／敷：和田、1・2 階平：道家  
第 2 章 高島家住宅／敷（新旧）：和田・三浦、コンクリート蔵 1・2 階平：金出、同屋上平：和田、隠居・貸し家平：金出  
第 3 章 相馬綱業協同組合／敷：南相馬市文化財係、事務所 1・2 階平：金出  
表紙デザイン：松本美和子（南相馬市教育委員会文化財課）

## 目 次

はじめに	2
例言	4
案内図	6
年表	8
第1章 朝日座 原町区	
朝日座の建築	9
朝日座の舞台裏	12
朝日座を楽しむ会の歩み	14
古写真	16
屋根葺替と工事見学会	18
文化財登録記念：おめでとさん会	20
図面	24
第2章 高島家住宅 小高区	
高島家の建築 背景 コンクリート蔵 煉瓦門塀	27
報徳碑と古写真	34
小高思ひ出かふえ	36
煉瓦塀と門の修復	38
隠居と貸し家	40
図面	45
第3章 相馬絹業協同組合 小高区	
相馬絹業の背景と建築	49
背景	49
ランドマークとしてのモダニズム建築	50
立地と建物	51
事務所の建築	53
小高の絹織物業	54
古写真	56
設計図と設計者	70
史料・図面	72
実施した建物調査	77

## 案内図・建物位置図

2012年から2016年にかけて実施した調査は、市内の全3区に及び、16箇所を対象とした。調査の詳細は、巻末に掲載。

北から南に向かう順番に、  
建物の位置と外観を示す。  
本書で扱う3件には★印を付す。

### 掲載地図凡例

- ：南相馬市
- ：原町区市街地
- ：小高区市街地



■1 大谷家住宅（登録有形文化財）



■3 但野農機具製作所



■2 朝日座（登録有形文化財）



■4 小林眼科医院



南相馬市全図 及び 右市街地範囲外の建物位置図



建物位置図



■ 6 青田家住宅



■ 9 柴田家住宅



■ 12 小高銀砂工場



■ 7 相馬小高神社



■ 10 鈴木家住宅



■ 13 相馬綿業協同組合



★ 8 高島家住宅



■ 11 締屋呉服店



■ 14 木幡家住宅



S= 1/25,000



■ 15 大悲山石仏仏教館



■ 16 天野家住宅

## 年表 2012-2016

活動	出来事
<b>2012</b>	<b>2012</b>
8月 朝日座調査（朝日座を楽しむ会）	5月 朝日座屋根葺替工事
<b>2013</b>	<b>2013</b>
3月 朝日座屋根葺替見学会	12月 朝日座登録有形文化財に答申
4月 朝日座屋根葺替お披露目会	
8月 朝日座古写真上映会	
10月 原町まちあるき	
12月 朝日座おめでとさん会	
<b>2014</b>	<b>2014</b>
4月 南相馬市文化遺産を活かした復興まちづくり実行委員会（以下、実行委員会）による建造物調査開始（2016年3月まで継続）	5月 朝日座登録有形文化財官報告示、朝日座文化財登録プレート授与
<b>2015</b>	<b>2015</b>
4月 朝日座大掃除	3月 朝日座説明板設置
5月 南相馬市教育委員会による建造物調査開始	7月 大谷家門・東蔵補強工事
5月 朝日座一般公開／主催：実行委員会	
7月 小高あるき（小高区市街地建物見学会） 主催：小高地域構想ワーキンググループ	
10月 小高あるき（小高区市街地建物見学会）／ 主催：小高地域構想ワーキンググループ	
11月 南相馬市文化遺産めぐり（原町市街地建物見学会・朝日座見学会）／主催：実行委員会	
<b>2016</b>	<b>2016</b>
1月 南相馬市の歴史ある建物や町並み調査報告会【朝日座にて】／主催：実行委員会	3月 大谷家東蔵・中蔵・門登録有形文化財答申
3月 まちあるきマップ作成／発行：実行委員会	3月 高島家コンクリート蔵防水工事
5月 原町まちあるき（原町区の建物見学会・朝日座見学会）／主催：南相馬市教育委員会	3月 常磐道全線開通
9月 伝統技法研究会 南相馬市視察	7月 小高区避難指示解除、常磐線 原ノ町～小高間開通、相馬野馬追時火の祭再開
10月 小高思ひ出かふえ（高島家住宅蔵にて古写真上映会 小高区文化祭にあわせて）／主催：小高の歩みたんがく会	7・8月 大谷家味噌蔵修理工事
11月 小高大蛇伝説まちあるき（高島家住宅公開等 小高区スタンブラー）／主催：小高の歩みたんがく会・南相馬市教育委員会	8月 大谷家住宅東蔵・中蔵・門登録有形文化財官報告示、大谷家住宅 文化財登録プレート授与
	10月 高島家煉瓦塀修理工事
	12月 高島家コンクリート蔵左官工事
	12月 常磐線 相馬～浜吉田間開通 (南相馬から仙台方面全線開通)

# 第1章 朝日座

国登録有形文化財(2014)  
福島県南相馬市原町区大町1丁目120

敷地の奥に建つその姿は、朝日座そのものが自らを演出しているかのような存在感を与える。平成24年の夏、再訪した朝日座で、探検するように裏方に残る芝居小屋時代の棧敷席や楽屋などを次々と目にしたこと、朝日座が今まで積み重ねてきた原町の歴史を見た。

朝日座こそが、南相馬市の建物調査の本格的始動、そして人々のつながりを生みだすきっかけそのものとなった。

## 朝日座の建築

朝日座は、福島県南相馬市原町区に所在し、近世の宿場町として栄えた原ノ町宿を南北に走る陸前浜街道（通称：野馬追通り）と、近代の鉄道開通により発達した東西に走る駅前通りが交差する四ツ葉交差点から東側へ一本入った通り沿いの敷地奥に西面して立つ。

## 創建と沿革

朝日座は、地元旦那衆12名により結成した旭



朝日座の正面 三角屋根とてっ�んの屋根飾りが印象的なシルエット。淡い黄色い壁によく映える「ASAHIWA」の文字は、当時の館主布川氏によるデザインで斜体の時代もあり意匠が凝らされていた（布川夫妻への聞き取りによる）

座組合の組合長日下庄吉と工事請負人関場清松により、大正12年（1923）7月2日、芝居小屋兼常設映画館「旭座（あさひざ）」として落成した。その後、昭和26年（1951）に「朝日座」に改称、昭和30年代に映画専用館に大改修し今日の姿になる。平成3年（1991）に館主布川雄幸氏のもとで常設映画館としては閉館を迎えたが、その後も定期的に映画上映やイベントを開催し、映画ロケ地としても活用されている。

旭座組合長の日下庄吉は、小高町（現南相馬市小高区）の出身であり原町で不動産業を営み、工事請負人の関場清松は現在の関場建設株式会社の創業者であり、朝日座の創建前には大正10年（1921）に開局した鉄筋コンクリート造で高さ200mの無線塔を有する煉瓦造りの原町送信所を手掛けた（いずれも現存せず）。

朝日座の創建を裏づける史料として、創建時の建設工事請負契約書、及び落成記念撮影写真がある。

#### 朝日座の特徴

朝日座は、木造二階建て外壁モルタル塗仕上げで、正面は切妻造りにバラベット（正面に四角く立ち上がった壁）を立ち上げ、背面は寄棟造の瓦棒葺きである。小屋組は梁間10mを越す芝居小屋の大空間を柱なしで確保できるトラス構造である。正面から見ると立ち上がったバラベットから切妻屋根の三角形がのぞき、さらにその頂上に高さ約2mの飾りが設置され、地域に親しまれる朝日座の特徴であり顔となっている。

**外観** バラベット裏には曲面状の屋根と旧バラベットが、北西隅には当初の軒蛇腹が部分的に残る。外壁仕上げはモルタル塗りだが北西隅及び二階開口部の内側に当時のドイツ壁が残り、昭和



南から見る 下屋部分のかつての看板繪描の作業部屋内部には多数のペンキ跡が残る



北から見る 南面と同様に映画館として使用するため二階開口部が閉じられている



北面東隅に軒蛇腹の断片が残り、当初の朝日座の姿を伝えている



正面バラベット裏に曲面状の屋根が残る。  
屋根葺替工事の調査により判明

10年（1935）の秋市興行で撮影した写真を元に描いたイラストからも、かつて正面全面がドイツ壁であったことが窺える。またこのイラストでは現在正面脇に位置する券売所が正面中央に描かれている。

**一階** 現在椅子席となっている客席は、落成記念撮影写真から当初は桟席で北側に花道があつたことがわかるがいずれも痕跡は失われている。映画館の時代の改造で南・北面の桟敷席は仕切り壁により封鎖されたが、この裏に当初からの桟敷席がほぼ完全な形で残り、当時の床板や畳敷きの跡、手すりが見られる。なお、無声映画時代には客席後方に臨官席が設置されていた。

**二階** 一階にもある北・南面の桟敷席に加え、西面の仕切り壁の裏にもほぼ完全な姿で桟敷席が残る。西面の桟敷席は舞台側に向か傾斜しており舞台が見やすい工夫がされている。東面の舞台裏は、かつて役者の楽屋及び宿泊部屋として使用され、今は大きな一部屋となっているが、一間間隔に立柱下方の手すりの痕跡から簡易な間仕切りにより6部屋に区切られていたと推測される。映写室の両脇の空間は映画館の時代には弁士の住まいであった。

**奈落** 舞台及び北側の桟敷席の下には奈落が残る。当初から床仕上げではなく、地面に敷いた簀子や貸し火鉢、台本置き、黒板などが残る。回り舞台の痕跡は確認されなかった。

**天井** 客席天井には、かつての折上げ格天井が残る。格縁は繰り型付きの薄緑色のペンキ塗りで4.5尺間隔に配置され、天井板は格縁内ごと一体に外せるよう胸縁が止められている。引き札（廣告）の貼り替えのためかと思われるが、紙の貼られた痕跡は認められない。当初天井と現在の天井の間には、さらにもう一時代の天井があり合計3代の天井が残る。舞台側の小屋裏には上演に利用



ステージ側の小屋裏から見た洋風トラス



緑色のペンキが塗られたかつての格縁天井  
(下方が現在の天井の裏)



小屋裏に残る舞台装置の滑車。滑車前の固定された丸太には、縄の擦れた跡が深く残る



小屋裏に残る折上げ格天井（当初天井の裏より）

## 朝日座の舞台裏

朝日座には当初の芝居小屋から映画館時代、そして現在までの歴史が形として積み上げられてる。芝居公演や映画上映のほか、弁士の住まいや学芸会の会場など、様々な人が集まる場所であった。



### ■ 北側二階棧敷

南面と同様に床板と畳敷きだった荒板が残る。手摺内側には煙草を押しつけ消したような焦げ跡が多数見られる。



### ■ 北側一階棧敷

非常口を新設し分断されているが棧敷が残る。天井はクリーム色、奥は紫色などベンキの色から改修変遷が窺える。



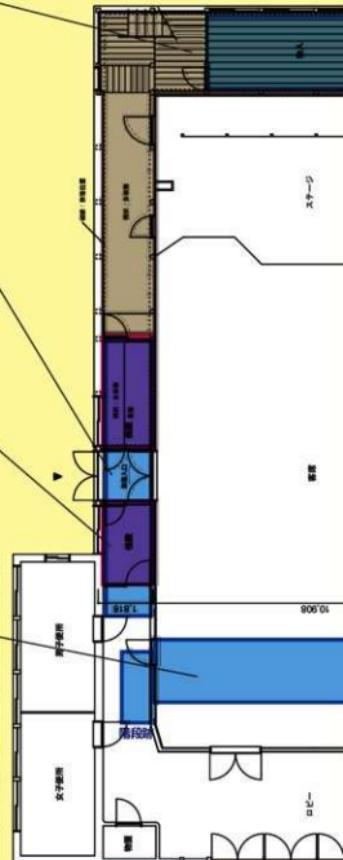
### ■ 西側二階棧敷（大向こう）

映写室の仕切り壁の裏にほぼ完全な姿で棧敷が残る。舞台側に向け傾斜し、舞台が見やすくなっている。傾斜した手摺や垂れ壁が残る。棧敷の北側には、かつての階段の框や手摺の痕跡が残る。



### ■ 舞台下の奈落

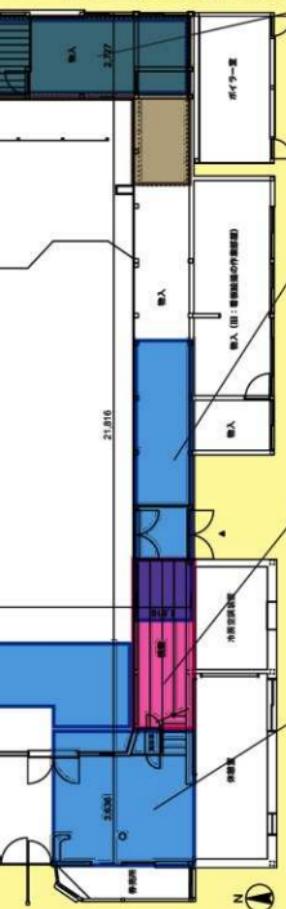
台本置きや貸し火鉢などが残る。回り舞台の痕跡は発見できていない。





■舞台裏の二階

かつての楽屋で、役者たちが化粧をしていたという。当時の役者が書き残した文字が壁に残る。



■南側二階棟敷

疊敷だった荒板（床左）と板敷き（床右）があったことがわかる。手摺もそのまま残されている。



■南側一階棟敷

現在の電話室の奥にある。手摺がそのまま残され、右側には階段手摺と思われるものが残されている。



■二階映写室手前の部屋

かつて弁士の家族が暮らしていた部屋。子どもは二階棟敷の手摺に上って遊び、一階に落ちたこともあるそう。（弁士のご家族からの聞き取りによる）

した滑車や足場が残る。

その他 建物南面にはボイラー室や冷房空調装置、看板絵描の作業部屋がある。建物南側の空地の一部には、かつて看板絵描の住まいがあった。

近年の改修 平成 23 年（2011）の東日本大震災による建物被害はほとんど見られなかつたが、雨漏りが続いているため平成 24 年度に屋根改修工事を行った。瓦棒葺き屋根の旧状については様々な証言が寄せられたが、事前調査の結果、野地板は小屋組の化粧裏板を兼ねる当初材の厚板であり他の葺き材の痕跡はなかった。従って経年劣化した鉄板を撤去し木部を補修、建設当初と同様に職人の手作業による工法を採用した。撤去した銘入亜鉛鉄板の一部を史料として保管している。また取り外され保管されていた東側の屋根飾りを屋根に復旧した。なお現在の正面外壁は平成 23 年にペンキで塗り直されている。

#### 朝日座の評価

朝日座は、時代の変遷とともに行われた改修履歴が積層し、今にも当初の芝居小屋の形態をほぼ完全な姿で残しており、芝居小屋が常設映画館に至る改修の履歴を知ることができる貴重な建物である。また、かつては芝居や映画といった昼夜にわたる非日常空間のほか、学芸会や発表会などの日常空間を提供し続け、一方役者や弁士などの生活の場ともなり、朝日座に係る人々の生活にとつて欠かせない特別な役割を持つ建物であった。現在その姿は、青春の思い出を想起させる地域にとって親しみある存在となっている。

朝日座は、原町の町並みの重要な要素であり、建物の歴史とともに朝日座に係る人々の記憶をも後世へ継承する地域にとって貴重な存在である。

竣工：大正 12 年（1923）7 月 2 日  
根拠：創建時の建設工事請負契約書、  
落成記念撮影写真  
設計：不明  
施工：関場建設株式会社  
所有者：一般社団法人 朝日座

#### 朝日座を楽しむ会の歩み

##### 震災前の歩み

平成 19 年度南相馬市マナビィカレッジ事業・生涯学習振興事業の一環として開催された「生涯学習まちづくり講座」に参加した朝日座を守りながら、保存していきたい有志によって、平成 20 年（2008）3 月に「朝日座を楽しむ会」が立ち上がった。

会では、朝日座の存在と映画上映と寄席などの活動を楽しむことによって、朝日座が将来に遺り、地域に生かされることにつなげることを目的とした。この目的に沿って、東京国立近代美術館フィルムセンターの協力を得た上映会のほか、今まで続く朝日座サロンなどの活動が行われている。

平成 21 年（2009）には朝日座維持・保存についての陳情書を、朝日座を楽しむ会、栄町共榮会、栄町商店振興組合の連名で市に提出したが、具体的な動きに結びつかなかった。

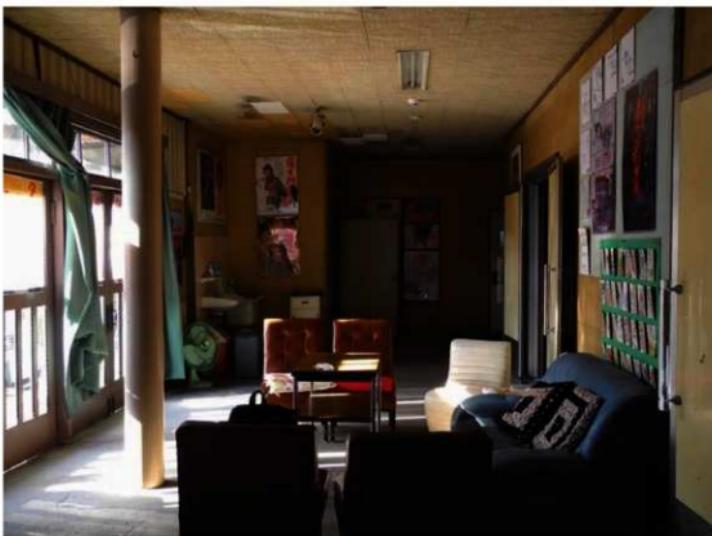
##### 震災後の歩み

平成 23 年（2011）3 月 11 日の東日本大震災を経ながら、楽しむ会は同年 6 月という震災間もないなかで復興映画祭を開催した。その後も朝日座映画祭や朝日座寄席など、震災の影響が強い状況の中でも積極的な活動を行った。

さらに同年 12 月には一般社団法人朝日座を設立。個人所有であった建物の所有権を社団法人朝日座に移転し、今後の保存活用の組織体制を整えた。



ホール 昭和 31 年 (1956) から高藤建設により映画館として改修工事を始め、昭和 35 年 6 月に現在の姿に完成。写真左側の壁の裏などには提灯が並んでいたという棧敷が残る。朽席の撤去は昭和 28 年 (1953) 以前という (布川夫妻への聞き取り)



ロビー 昔の映画ポスターがいくつも飾られ、映画上映やイベント後には笑顔の人々で賑わう。かつては建物正面にあたる、写真左側の鉄柱のあたりに受付があった

### 「旭座」落成記念撮影写真（大正 12 年（1923））

聞き取りからは、昭和 31 年に本格的に開始された映画館への改修工事以前の内部写真は残されていないとのことだが、大正 12 年に「旭座」が落成した記念撮影写真が残る。

羽織袴姿の旦那衆の後ろに下がる緞帳には、堂々とした文字で「旭座」（昭和 26 年に「朝日座」に改称）とあり、中央には朝日と思われる円形と

鶴が描かれている。また、出資会社が連ねられており、なかには現在も原町にて営業を続けている会社がいくつか見られる。

客席は畳敷の棋席、下手には花道の一部が見え、天井からは笠の付いた電球の照明が数本ぶら下がっていたことがわかる。

また、写真台紙には「佐藤写真館 原町市中央通り」と書かれている（写真①）。



①落成記念として旦那衆 12 名のうち 8 名が舞台前に並び撮影した記念写真（大正 12 年撮影）布川雄幸氏所蔵

落成記念写真に写る旦那衆

（布川雄幸氏のメモより）

関場 清松 建設請負	山本 直蔵 鶴谷 株主	桜井 今朝松	吉田 寅蔵 鶴谷 株主
佐藤 宏（芸名 南部幹人）	日下 庄吉 小高町鶴原 株主代表		

### 当時の姿（昭和 11 年）

朝日座の建物調査や公開イベントを続けるなかで、通り西向かいの自宅ベランダ 2 階から撮影された、当初と思われる朝日座の写真が初めて発見された。写真に写る子どもたちの 1 人が昭和 5 年生まれであり、朝日座が建てられてから 13 年後の昭和 11 年の写真だと考えられる。

妻面には右から読む「旭座」の文字が見える。屋根頂上部の飾りは現在と変わらない（写真②）。現在の二階開口部の内側に残る当時のドイツ壁が、本写真的外壁と同様であると考えられる（写真④-1）。当時の外壁は正面左側の一階部分と合わせ 2ヶ所に残っている（写真④-2）。

また、昭和 10 年の秋市興行を描いたイラストからもドイツ壁であったことが窺える（写真⑤）。

### 原町映画劇場オープン記念写真（昭和 26 年創建）

朝日座が映画館として改修工事を行う約 5 年前に完成した原町映画劇場は、映画館として改修された朝日座の外観や内部の様子など、多くの共通点を持っている。いずれも高藤建設が施工しており、現在の朝日座は、原町映画劇場の姿を取り入れたことが窺える（写真③）。



②当時の朝日座と思われる写真。妻面に当時の名称「旭座」の文字が見える。渡辺昭夫氏所蔵



③昭和 26 年に完成した原町映画劇場のオープン記念写真。布川雄幸氏所蔵



④-1 正面二階の窓内側 ④-2 正面左側の一階部分  
当時の外壁が 2ヶ所に残る



⑤昭和 10 年の秋市興行時の写真を  
画にした資料（鹿又泰・画）。二上英朗氏所蔵

## 屋根葺替と工事見学会（平成24年3月2日）

### 屋根の調査

屋根の老朽化による雨漏りのため屋根葺替工事を行うこととなった。工事にあたっては、屋根南面の痕跡および聞き取りから屋根材の変遷などについて調査を行った。「強風で瓦屋根が飛んだ」と聞いたことがあるとの声も聞かれたが、痕跡調査では瓦葺きや一文字葺きの痕跡が見られなかつたため、最終的に地元の方々が最も見慣れている赤色の瓦棒葺きとすることが決まった。

東端頂部の屋根飾りは、映画館として改修工事した際に強風時に風切り音がするということで下ろされていたそうだが、本工事により復活し、より生き生きとした姿となった。

同時に行われた非常口の扉の取替えについては、建物の年代や改修変遷を示す鉄板貼りや2色のペンキ塗り部分は基本的に現状維持とし、傷みが著しい部分のみ取替えが行われた。

### 工事見学会

工事中にしかできない、屋根を間近に見て触ることで、朝日座をもっと知つてもらうための屋根工事見学会を開催した。

遠くから見ただけではわからないが、足場にのぼり、当初だと思われる工法通り、トタンを丁寧に折り曲げ釘を打つ職人の技を間近で見ることが



どのような修理を行うか調査している様子



屋根葺替工事の様子



屋根葺替工事見学会 工事中にしかできない足場にのぼり間近で工法や素材を見て触る見学会を開催した

### 屋根工事の基本的な考え方

- 国登録有形文化財に向け、外観は歴史的建造物としての根拠（聞き取り・痕跡）を元にした工事をとした。
- 歴史的建造物としての根拠が不明の場合は、地元の方々が最も親しんでいる現在の形状を維持することとした。将来的に、明確な根拠が判明した際は、根拠に基づき復原することが考えられる（南面は一文字葺きの痕跡が見られなかつたが、今後、東面の一文字葺きの痕跡を調査し、当初が一文字葺きと判明した場合、厳正な復原を考えると東面のみ一文字葺きだった可能性も考えられる）。
- 建物内部の破損は、雨漏りが原因となっている箇所が多いため、大屋根の工事を優先的に行い雨漏りの原因を根本から除くこととする。

できた。また、近くで見る屋根飾りは、地上から見ていたものとのスケール感の違いや、屋根飾りの細かな装飾を観察することができた。予想以上に高く感じる足場にのぼり、おっかなびっくりしながらの体験だったが、特別な機会となった。

同年4月27日には、完成した屋根のお披露目会を開催し、同時に朝日座の舞台裏、舞台袖、映写室など普段入ることができない場所を見学する見学ツアーも同時開催した。ロビーではお披露目会の感想や、朝日座の活用アイディアをいただき、多くの地元の方々でロビーが賑わった。



屋根葺替工事前の朝日座

## 屋根葺替お披露目会で参加者からいただいた声

朝日座探検ツアードで興味があったこと

- ・舞台裏ツアーが一番おもしろかった。旅芸人の落書きやサインに「芸」への思いを感じた。
- ・朝日座の裏の部分があることがわかり、市民に広く知ってもらいたいと思った。
- ・屋根が鮮やかなエンジ色でとてもきれい。樋なども銅製に直したい。
- ・朝日座をこんな風にしたい、というコンペをするとおもしろい。
- ・朝日座の謎ツアーがおもしろかった。よくわからないうことがいろいろあっておもしろい。
- ・朝日座に住んでいた方の物語を知りたい。
- ・奈落の底ツアーがあると楽しい。
- ・いつも新発見がありうれしい。
- ・自分が生まれたときには映画館だったため、芝居小屋としての役割と、その後の変遷が興味深かった。

## 朝日座の活用アイディア

- ・仮設住宅に住んでいる高齢者の方に朝日座で楽しんでもらうことを考えたい。昔の映画上映や朗説など。
- ・青葉幼稚園で60年ほど前に学芸会を朝日座で開催したことがある。
- ・朝日座で当時の思い出を話す「思い出はなし会」を開催してはどうか。



屋根葺替お披露目会 屋根工事内容の解説をしている様子。写真的の屋根右側の屋根飾りが本工事により復活した

## 文化財登録記念：おめでとさん会

平成25年12月14日

相双地区初の国登録有形文化財（建造物）の告示を受け、これまで原町で人々が集まる拠点として活躍し続けてきた朝日座を祝うため「おめでとさん会」を開催した。

当日は、これまでの朝日座や原町区の歴史的な建物や町並みの調査およびイベントの開催報告のほか、朝日座の映画上映、舞台裏や棧敷などをまわる見学ツアーも実施した。特に見学ツアーでは朝日座の芝居小屋時代のあらゆる痕跡に注目した解説が行われ、盛り上がりを見せた。元館主や地元の方々、これまでの工事や調査などに協力してくださった方々から多くの参加があり、人々を引き寄せ、つなげる朝日座の魅力は健在であった。

この日、朝日座が南相馬市の歴史的な建物や町並みに関する取組みを牽引する新たな出発点となつた。



記念撮影 舞台前に並ぶ皆たちが写る朝日座落成記念写真を真似てパシャリ。平成に新たな歴史が刻まれた



映画「幸せの黄色いハンカチ」をモチーフに、いつもと異なる顔を見せる朝日座



ロビー 昔の映画ポスターがいくつも飾られ、映画上映やイベント後には笑顔の人々で賑わう。

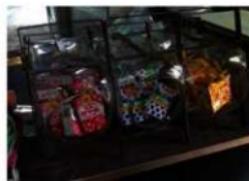
### おめでとさん会の限定のグッズ詰め合わせ

朝日座を楽しむ会青年部の協力の元、一度しかないお祝いの機会に、ご来場いただいた方への御礼として、限定グッズを作成・配布した。

- トートバッグ、缶バッジ（おめでとさん限定、朝日座写真）、名刺サイズカード、ポストカード、クラッカー、ロウソク型ライト、チケット



おめでとさん会の限定グッズセット。クラッカーも大活躍した



朝日座大掃除で見つかったガラス製のお菓子入れを実際に活用



受付ではチケットもぎりも行った

### 一おめでとさん会のその後一

(右) 国登録有形文化財ブレードのお披露目会も行った。

(下) ブレードは、現在も大切に  
ロビーに飾られている  
(平成27年5月10日)



## 朝日座の小物類

建物調査にともない、朝日座に関する小物類を見せていただき、また大掃除で新たに発見するものもあった。元館主の布川氏は、アイディアマンでグッズつくりなどが得意だったという（布川夫妻への聞き取りによる）。朝日座の建物、そしてそこに関わる人々や使われていた物などからも、朝日座の歴史を知り、深めることができる。



倉庫から見つかった昭和 46 年 3 月 30 日まで有効なご招待券



正面外観と内部が描かれた封筒が見つかった。当時の館主布川雄幸氏の知り合いの原町高校の美術部の方が描いたという



駅前通りの木村印舗が作成したものもあるという  
朝日座の判子

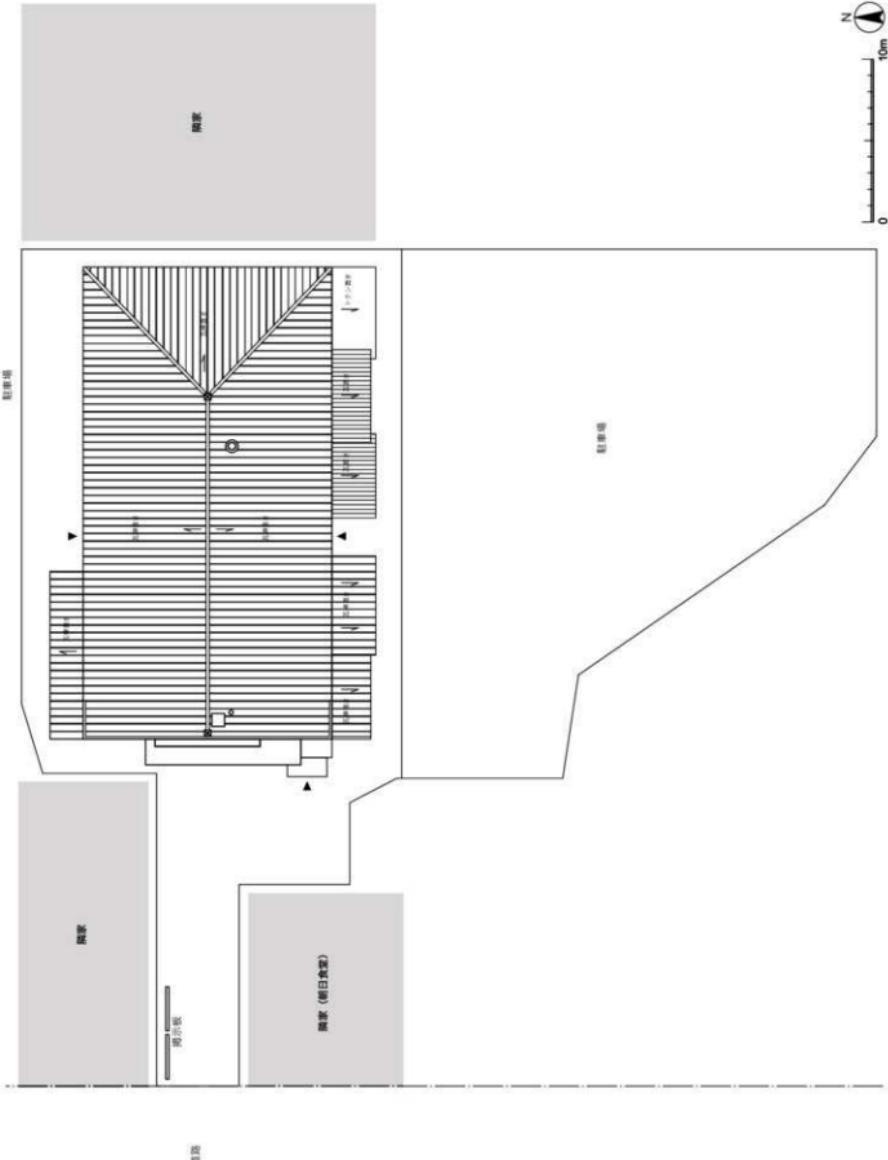


二階から見つかった映画館時代のお菓子の値札など



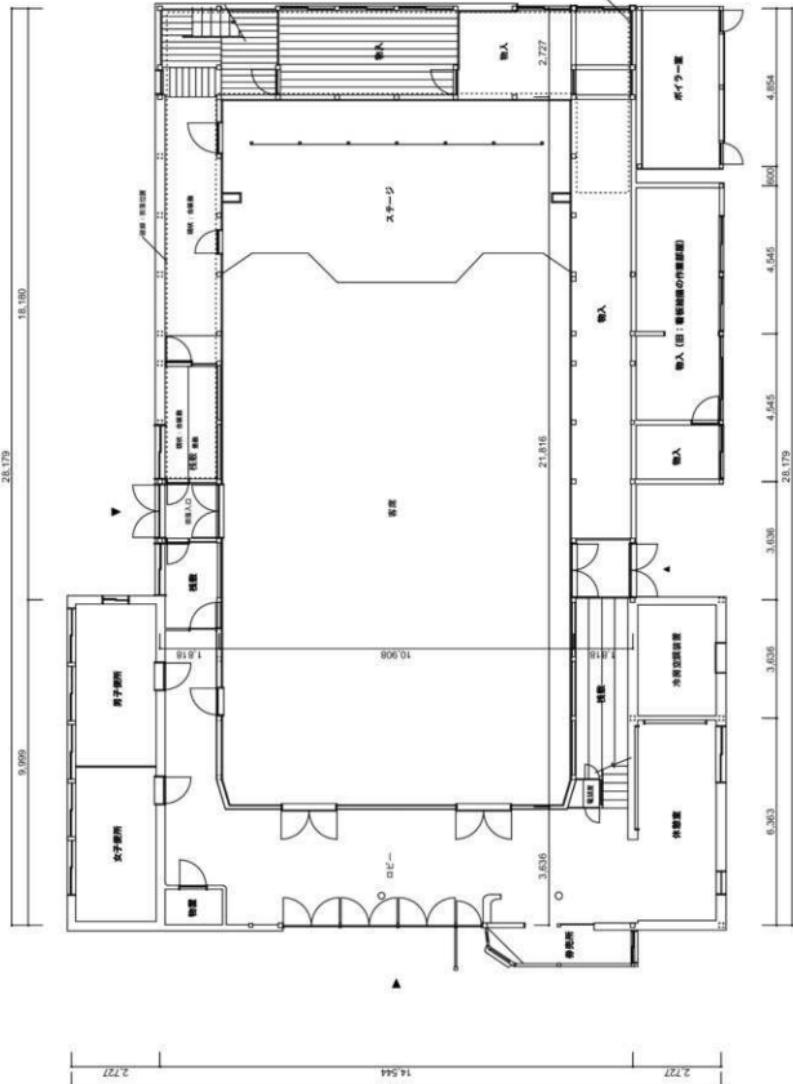
## 参考文献

- ・布川雄幸・二上英朗「朝日座全記録 1923 ~ 2003」  
2003
- ・若松丈太郎編集『開館 50 周年記念 わたしと朝日座  
1921—1971』1971 年 11 月 3 日 朝日座



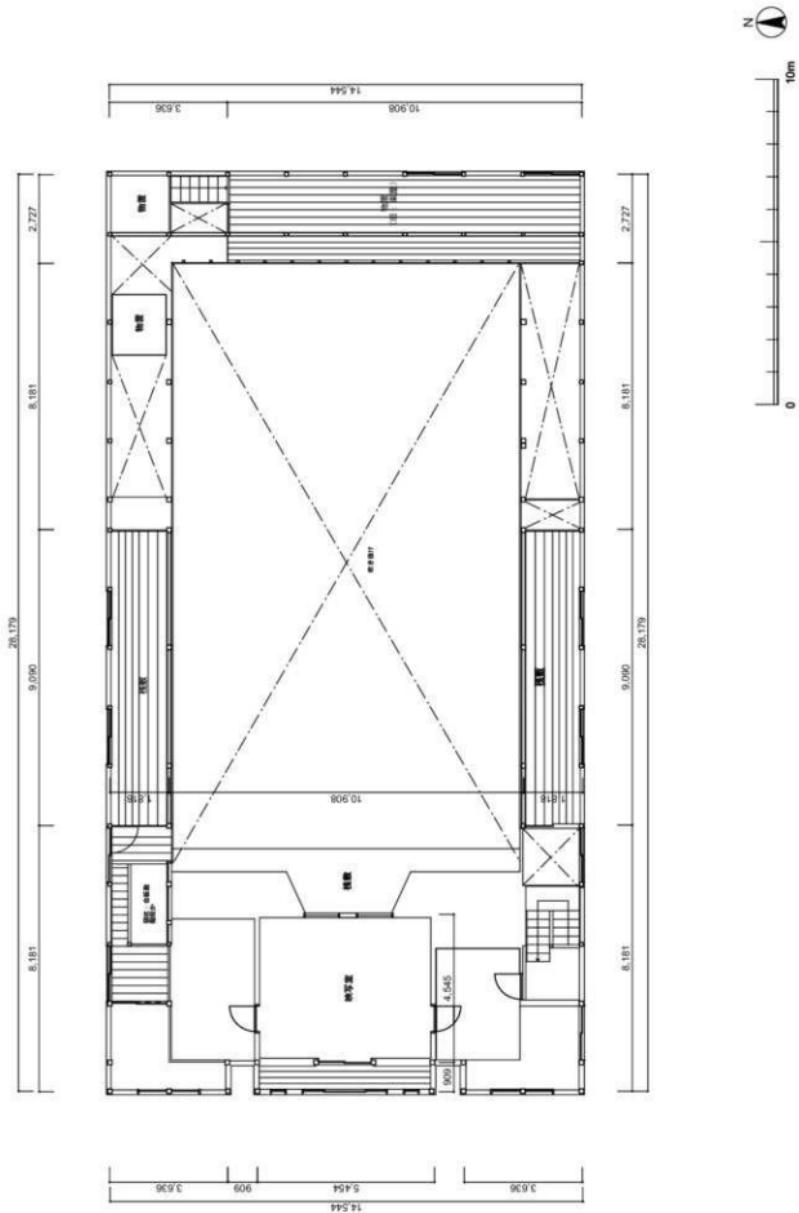
朝日座 敷地配置図

S=1/300



朝日座 1階平面図

S=1/150



朝日座 2階平面図

S=1/150

## 第2章 高島家住宅

福島県南相馬市小高区上町 1-87

### 高島家の建築

一連の建物調査に先立ち、小高の写真に目を通したところ、屋上のある高島家のクラは今まで見たことのない独特な姿をしていた。その後現地を訪れ、たいへん手のこんだ左官仕事や和洋折衷の細部を知るにつれて、これこそが「小高スタイル」なのではと考えた。

昭和初期にこのよう建築作品を建てようと思った初代と施工にあたった職人たちの意氣込みに圧倒される。変形の敷地に寄り添う建物それぞれが語り合うように、小高のまちをまもってきた。

印象深い姿の高島家のコンクリート蔵は、小高の上町にある。江戸時代以来、浜街道を北の原町方面からあるいは小高の山手から訪れる人々にとって、市街地の中でも駅から離れた上町が小高の「まち」への入口だった。

高島家は街区の突端の角地にある。小高川を渡りまちに入ると、最初に見えてくるこのコンクリート蔵は、小高の要所をおさえる城のやぐらのようである。

相馬野馬追の二日目の行事を縮める火の祭で打ち上げられる花火を見に、「ペランダ」と呼ぶ屋上に招待され、飲食でもてなされたことをこの土地の人々は懐かしむ。



通りに面して、貸し家（左端）・コンクリート蔵（左）・隣居（中央）が煉瓦塀とともに並んでいた。



コンクリート蔵を庭から見る

明治時代に小高へ移住した太田出身の初代高島慶治郎（明治5年[1872]-昭和17年[1942]）は、現在地で鍛冶屋を始めた（現在主屋のある位置にあった）。親方を慕う弟子たちにより、報徳碑（大正9年[1920]銘）が建てられている（古写真①）。

慶治郎は40歳の時に鍛冶屋の店じまいをし、一時的に朝鮮に渡った後、小高に戻り隠居した。高島鍛工の浪江の店の番頭であった2代目勝好は呉服店を開店（地元の綿屋呉服店より仕入れ）、その後紙すき工場を経営したり（障子紙や唐傘用の紙を製造。職人を10人ほど雇い、精を割く段階から手掛けた。）、農協に勧められて養豚を稼業としたこともあつた。高島家は平成に入つてからは、主屋（1972年に建て替えた）に隣接するクリーニング店を営んだ。このように時代の流れに応じて、様々な商売を手掛けってきた。

#### コンクリート蔵

「クラ」と呼ばれる鉄筋コンクリート造の建物は、梁間2.5間、桁行4間の2階建、陸屋根を壁面上部から張り出し、洋風意匠の持ち送りで支える。外階段から登る屋上の周囲に施された装飾的なバラベットでは、開口を交互に菱形と長方形とし、各親柱上端に四角の笠木を設ける。

床下叩きはモルタル塗、自然石に束を立てて、1階床組を支える。

外壁はモルタル塗刷毛引き仕上げ、軒下持ち送りの漆喰仕上げを黒と白で塗り分け、めりはりをつける。軒廻り、腰廻り水切り下方、南面窓周囲、隅部及び石造風の目地入り基礎はモルタル塗洗い出し仕上げとする。左官職人が、セメントと漆喰を自由自在にあやつり施した多様な仕上げが、外観を表情豊かにする。

1・2階とも南面に鉄扉戸付きの開口部を開ける。1階西面には、外側に隣接する隠居から出入りする観音開きの鉄扉と内側に板戸を設け、かつては渡り廊下で繋がっていた。

北面の外階段は、庭側の東寄りに上がり口、2階床の高さにテラスを設け、屋上へと誘う。鉄管製手摺りの手摺り子間には、かつて唐草模様の装飾が取り付いていたが、第二次世界大戦中に金属供出されて現存しない(古写真③に見られる)。屋上に入る踊り場のバラベットには、モルタル細工による紋章が取り付く。

テラスは北面出入口の蔵前庇を兼ねる。戸前に石段、出入口周囲は左官による伝統的な鳥居構えとし、鉄扉で戸締まりする。この内側には板戸と格子戸の引き戸を設ける。板戸錠前金物は、宝尽くしの松竹梅さらには鶴亀と月、七宝で飾られる。テラス兼庇を支える洗い出し仕上げの角柱を笹縁りを付けた和風としながらも、下方には幾何学的な形態を取り入れ、2重の円盤と未広がりの円柱を基礎とする。なお、庇の桁には鉄骨代わりに小断面の線路材が用いられている。

室内は、1階を倉庫とし、床は板張り、壁は軸部を見せる真壁、モルタル塗刷毛引き仕上げとす



テラスから屋上に張り出す階段と踊り場

る。開口部は、片引きのガラス窓。天井は半間ごとに架けられた2階床組の大引きを見せ、東側に2階に上がる階段を設ける。

2階は、和洋折衷の居室とし、2代目が新婚時に住んだことがあった。東端半間を板張りの廊下とし、居室境には引き戸(欠扣)を建て込む。鶴居上には繰り型の施された長押が両面に取り付く。荒床周囲に疊寄せがあり、部屋は17.5疊相当である。また、階段上方に吊り押入を設ける。

壁は漆喰塗の大壁とし、天井周囲に漆喰塗コーニスを回し、中心飾りを設ける。窓周囲には左官による洋風の額縁を回し、木製の引き違いガラス戸を建て込む。この外側に金網と鉄格子を嵌める。



通りから見るコンクリート蔵

#### 高島家コンクリート蔵

建築時期：昭和初期

設計者：不明 施工者：時田組

構造形式：鉄筋コンクリート造、2階建、  
屋上あり

規模：梁間 4.545m × 柱行 7.272 m

階段踊り場  
壁の紋章





ベランダ周りの左官仕事を補修、リリしくなった



空まで届きそうな  
テラスの外階段



屋前の広い屋上へのテラスを兼ねる

### 煉瓦門塀

煉瓦塀は、屋敷地の南側から鋭角に折れて東側へと続く。基礎部を地中では階段上に張り出し、煉瓦半枚厚の組積造長手積みで壁を造り、要所に柱を立てる。上方では隣り合う長手積みの間に小口幅の隙間を設けて積み上げ、視線と風を通す透かし塀とし、修復前の塀上端には重厚な笠木を設けていた。

門の位置では袖壁を設け、通りから控えて扉の取り付く煉瓦造の門柱を立てる。鉄管を溶接した現在の門扉は、近隣の板倉鉄工所が製作した。(鉄工所は初代の弟子が経営、現当主夫人母親が板倉家出身)

門柱を塀と繋ぐ袖壁は、煉瓦の質感が塀と異なり、塀の煉瓦積みとかみ合っていないイモ目地であることから、一連の仕事ではなかったことがわかる。門の写る古写真④によって、当初袖塀はなく、門柱が通り沿いの煉瓦塀と同じ線上に立っていたことが裏づけられた。門移動の理由は伝わっていないが、元の位置にでは現在門前に立つ五葉松の枝と緩衝するので、庭との関係で行われたことも考えられる。また、当時の門扉は木製で板が透かし張りで敷居も見える。



扉のまわりは和風、鉄扉は新しかたち

## コンクリート蔵とレンガ塀の建築年代

南面及び東面を赤煉瓦の塀で囲まれた土地の南側に、外観を洋風とするコンクリート蔵が立つ。慶治郎が朝鮮から帰国後、地元の建設会社時田組によって建てられたと伝わる。コンクリート蔵及び煉瓦門塀の建築年代を明らかにする史料は発見されていないものの、建物の写る古写真中の人物の年頃と聞き取りより判明したことから、両者とも昭和10年頃までには完成していたと考える。(古写真的項参照)

上と同時代に建てられたという隠居(2016年解体)の新築は煉瓦塀があると工事の妨げになり、また煉瓦塀がコンクリート蔵の間際で納められていることからも、煉瓦門塀は各建物が竣工した後に建てられたと考えるのが自然であろう。昭和8年生まれの現当主夫人の絹代氏が祖母と煉瓦塀の前で撮影された写真(古写真②)は1930年代初期の撮影と思われ、塀がこの時までには完成している。この数年後に、コンクリート蔵の前で絹代氏と弟勝明氏が慶治郎と共に端午の節句の幟の前で撮影されている(古写真③)。外壁表面には雨水の跡も見られ、竣工から時間が経っていることがわかる。

東日本大震災時の揺れで、煉瓦積みの笠木を乗せた煉瓦塀は上方が転倒し、塀のところどころに亀裂があり、門柱は大きく傾いた。被災した塀を見ると、重たい笠木に振り回されて、透かし積みの弱い位置で折れて倒れたことがわかる。煉瓦塀には鉄筋のような補強は入っていないかった。小高区は原発事故に伴い避難指示区域に指定され、その後しばらく放置せざるを得ない状況にあった。

ようやく2016年秋に修復方針を決定し、一部形式を変更しながら、今後安全な姿で門塀を維持できるように修復した。当初は震災の足跡を残すために、一部破損したままの姿で残すことも検討したが、今後の敷地の活用を考え、安全な状態に門塀を復旧することに主眼を置くこととした。

煉瓦塀の修復と門柱の建て起しを行ったことで、コンクリート蔵と共に小高で長年親しまれてきた景観がよみがえった。町並みの中でも際だつ外觀を持つこの蔵は、建築時の時代性を色濃く反映する作品でありながらも、類似作品は建てられるることはなかった。当時は建設資金が不足し、土地を売るまでして完成した建物は、昔からの姿を保つ。赤煉瓦の門塀と鮮やかな対比をなすコンクリート蔵は、両者揃って特異な建築文化を象徴し、小高の景観をかたちづくる。



屏縫前にはおめでたさを山盛り、  
松竹梅そのうえ鶴亀も（上）  
出入口前庇柱の足元は円形（左）



軒を支える三角形の  
持ち送り

コンクリート蔵 室内



2階室内は和洋折衷のじつらえ



天井には照明器具の取りつく洋風中心飾り



漆喰を引いた窓額縁



階段を見下ろす

和風の階段手摺りと  
押入造作



2階室内 西を見る



1階室内



1階での建物写真展示／思ひ出かふえ【和田】

コンクリート蔵の修復 2015～2016年

- ・屋上床面の防水層が経年劣化していたので、防水工事を実施した。
- ・2階室内壁の白漆喰塗仕上げが、過去の雨漏りによって部分的に剥落していたので、傷んだ範囲のみ下地から塗り直して、漆喰塗を施した。
- ・屋上軒下の漆喰塗が、屋上面からの漏水によって落下し始めていた。既存の仕上げをできる限り残しながら、補修した。併せて、バラベット外側の装飾的な漆喰塗を塗り直した。親柱内側のコンクリートが風化し、骨材があらわになっていた範囲を、モルタル塗で補修した。修復の際には、当初の施工状況がわかるよう、状態のよい範囲は手をつけないように留意した。



東から見る全景



東隅では鋭角で曲がる



門袖塀に据えられた馬の像越しに  
見るコンクリート置



門と松の木



門袖塀と門柱



西から見る



庭の南東隅に残る報徳碑の  
前身台座には丹頂鶴

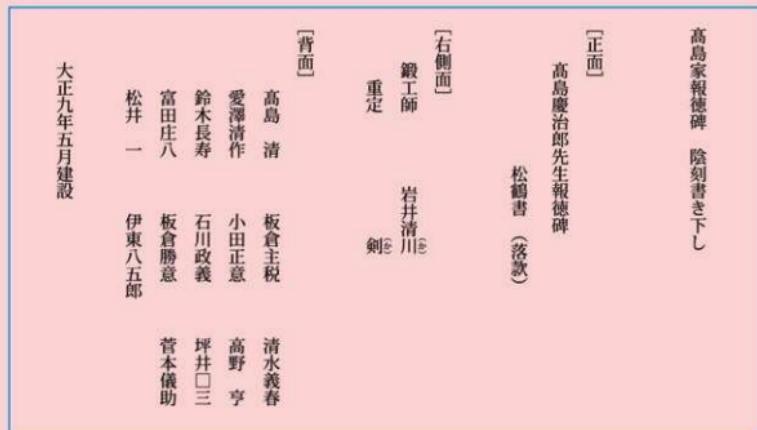
## 高島慶治郎報徳碑

初代慶治郎の弟子たちによって、報徳碑が立てられたのは、大正9年のことであった。庭の南東隅に立っていた報徳碑は、煉瓦塀修復の際に、庭からよく見える位置に移動し、新たな台座の上に立て直した。

もとの位置にある今までの台座には、丹頂鶴のつがいの像が立つ。



看板商品の方向転換ハンドル付き馬耕用の高島鞆(たき)を並べた店先。



初代慶治郎の弟子たちが顕彰碑を建てた。大正9年5月  
慶治郎は、石碑の正面に座る。「高島鉄工一族 建碑記念」

①



高島慶治郎報徳碑 敷地南東隅の位置を庭中央に移動し、台座を新しくした

## 古写真から建築年代をさぐる

コンクリート蔵・隠居（取り壊し）・煉瓦塀からは建築年代を明確にする史料は発見されていないものの、古写真と聞き取りより、建築時期を検討する。

① 大正 9 年（1920）に報徳碑が立てられた時の写真に写る慶治郎は、鍛冶屋をたたんで朝鮮に渡ったと伝わる 40 歳ぐらいに見える。（「高島慶治郎報徳碑」の項の写真参照）

従って、帰国後の昭和初期に、コンクリート蔵・隠居、次いで煉瓦塀を建てたとすると合致する。コンクリート蔵の 2 階には 2 代目が、昭和初期に当たる新婚時に住んだと言ふことも矛盾しない。

② 昭和 8 年生まれの絹代氏が祖母と煉瓦塀の前で撮影された。少女の年頃（4～6 歳ぐらい）からから、昭和 12～14 年の撮影と思われ、煉瓦塀がこの時までには完成していることがわかる。

③ コンクリート蔵の前で絹代氏と弟が初代慶治郎と共に端午の節句の幟の前で写る。昭 14 年生まれの弟勝明氏が 2、3 歳とすれば、昭 16、17 年の撮影となる。（絹代氏は 8、9 歳。）コンクリート蔵の表面には雨水の跡や二次世界大戦中に金属供出された手摺りの唐草装飾も見える。)



④ 門柱には当初袖塀ではなく、通り沿いの煉瓦塀と同じ線上に立っていた。この位置では、現在門前に立つ五葉松の枝と緩衝するので、植生との関係で移動されたことも考えられる。門扉は木製で板が透かし張りにされ、敷居もあった。（撮影時期は不明。写真左下に、小高の遠藤写真館の押印。）

## 小高思ひ出かふえ

2016年10月15日・16日

小高あるき　歴史的建造物の調査報告を兼ねた「小高あるき」と題した見学会が平成27年7月・10月に福島第一原子力発電所事故に伴う避難指示が出されていた小高区で開催された。この見学会において特に高島家住宅コンクリート蔵は「面白い」「これまで気づかなかった」などの多くの驚きの声が寄せられた。独特の外観、眺めの良い屋上テラス、漆喰壁の洋室などは、専門家だけでなく一般の方々にも魅力的に感じ取られていたようである。

小高の歩みたんがく会　この魅力をさらに活かすため、避難指示が解除されて約3ヶ月後の平成28年10月15・16日、小高区文化祭に合わせ、高島家住宅コンクリート蔵を活用するイベント「小高思ひ出かふえ」を開催した。イベントは南相馬市教育委員会のほか、市民活動団体である「おだかぶらっとほーむ」・「まなびあい南相馬」、



コンクリート蔵の細部の説明を受けながら、屋上まで登り、遠くまで広がる小高のまちを眺めた

小高区の復興をサポートする「小高復興デザインセンター」が共催し、改めて「小高の歩みたんがく会」という組織を設立した。なお、「たんがく会」の「たんがく」とは相馬地方の方言で、「持ち上げる」という意であり、「探る」「学ぶ」という意味をかけたものである。

思ひ出かふえ　イベントを開催するにあたり、高島家の特徴を活かしたものを作った。まずは、蔵2階の漆喰壁が白く美しいことから、これをスクリーンにした小高の古い写真の上映を行った。使用した写真は小高町史編さん事業で収集した写真を用いた。特に「写真集 おだかまちのすがた」(南相馬市 2006)に掲載した写真は昭和40年以前の古い写真が多く、「スライドのセピア色と白い壁がマッチしていた。」と好評を得た。用意した写真は約350枚あり、すべての写真を見るのに1時間以上要するが、来場者の多くが終わるまで席を立た



コンクリート蔵2階での写真上映会では、写し出される小高の風景や催しを懐かしむ声を口々にしながら、長い時間解説に耳を傾けた

なかった。

また、上映に際しては担当者から写真解説と共に、コーヒー・お茶を提供し、ジャズの音楽を流して、心地よい雰囲気作りに努めた。アンケートには「写真の人や町の表情が豊かで生き生きしている」「昔を懐かしく思うと元気が湧いてきた」といった好意的な声を多く聞くことができた。

**建物見学** 蔵の1階にはこれまでの建造物調査成果のパネル展示とともに、専門家による蔵の解説を行い、建物の特徴と独自性を伝えた。コンクリート蔵の最大の魅力である屋上にも上がって見学いただいた。当日は良い秋晴れの日で、屋上からは青空と小高い町並みを綺麗に眺めることができた。

**聞き書き** コンクリート蔵に隣接していた建物が震災後解体されたことにより、蔵の前には大きな空間が生まれていた。この空間は、建物が無くなうことにより、逆に透かし煉瓦塀と蔵をゆったりと眺められる場所となった。ここにテントを張り、上映した古写真の一部を印刷しておき、小高い思い出を語る場を創った。ここでの聞き書きの内容は「まなびあい南相馬」が自分史作り事業として今後活用する予定である。



庭にテントを張り、古写真上映によって引き出された思い出を来場者より聞き取った

コンクリート蔵の意匠  
を王冠に見立てたペーパクラフトに、子供たちは夢中になって色を塗り、かぶって見せた



昔の小高いことをよく知る方々から、多くのはなしをうかがった



場の透かし積みを模型  
煉瓦で積んでみる



小高い文化財にまつわ  
る缶バッヂ。大悲山の大蛇伝説、相馬小高神  
社、浦尻貝塚、相馬綱業、高島家住宅などを  
モチーフに

**小高グッズとクラフトワーク** 歴史ある建物にちなんだイベントであるため、アンケートに回収の景品として小高区の歴史に関係する缶バッヂを作成した。また、子供向けのイベントとして高島家住宅コンクリート蔵と相馬綱業協同組合事務所を形取ったお面作りや高島家煉瓦塀を積立てるクラフトワークを行った。これらのグッズ作りには、主催者側がかなり盛り上がって作成した。このような市民協働のイベントは「効果」よりも「楽しみ」も重要な要素であるといえる。

建物の良さを活かし、ここでしかできないことを楽しく行う。小さなイベントであるが、建物の保存活用の一つのあり方を示すという当初の目的は果たすことはできたのではないかと思う。



煉瓦は自地材をはつり落として再利用



塀の煉瓦積みを完了



もとと同じように透かし積みで復旧。一部段数を低くした



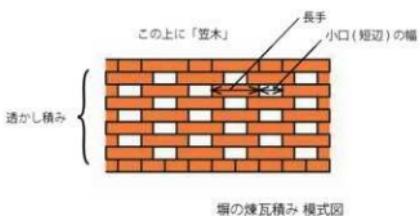
笠木をモルタルで施工中



煉瓦積み上端に鉄筋補強を導入



修復された袖塀



### ■ 煉瓦メモ

煉瓦の大きさにはばらつきはあるものの、おおかた長手 7.5 寸 × 小口 3.6 寸 × 高さ 2.0 寸 (227 ミリ × 109 ミリ × 61 ミリ) で、東京形と呼ばれた寸法に近かった。大正 14 年 (1925) に JES 規格、次いで昭和 4 年 (1929) に JIS 規格で煉瓦の寸法の統一が図られるまでは一般的な仕様であった。

■ 修復の概要（工事期間 2016年10月）

今回の修復に際しては、倒壊した塀の煉瓦を回収の上、モルタルをはつり落として再利用した。傾いた門柱を据え直した。塀については、将来同じように壊れることがないように、以下の工夫をした。

- ・場所によっては透かし積みの段数を少なくした（7段から5段へ）
- ・笠木は小振りに変更し軽量化した
- ・煉瓦積み上端に鉄筋を入れて補強し、モルタルで笠木をかたちづくった
- ・今までの高さの袖塀と低くなった煉瓦塀間の段差をモルタル塗で抑えた
- ・片側には表札を新設
- ・柱頂上をモルタル塗で山形にした

修復前の状況



修復前 東日本大震災時に塀上部が落下した



修復前 門柱は大きく傾いていた（高さ1mに対し40ミリ、北方向）。  
鉄扉は板倉鉄工所製作



修復前 袖塀への取付部に亀裂が入っていた



透かし積み7段と笠木からなる。隣地から見る（後設のコンクリートブロック造の「小屋」はその後撤去）



庭側から見る隠居。画面右のコンクリート蔵とはかつて渡り廊下で繋がっていた。  
庇部を増築、向かって右から台所・玄関・風呂場。中庭には日本庭園が造られていた



深い軒をセガイで持ち出す



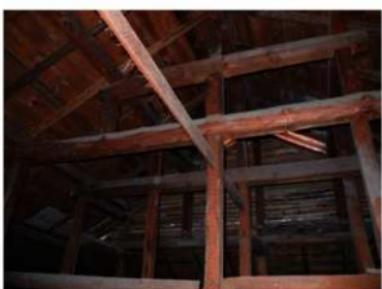
西面建具



南面鉄持ち送り



玄関を開あがったところの部屋。正面に仏壇。画面左奥に座敷



和風の伝統的な小屋組。棟札はみつからなかった



## 隠居

遠くからも見えるのは、赤い釉薺瓦の葺かれた入母屋造の屋根である。初代高島慶治郎の隠居は、コンクリート蔵と同時期に建てられたと伝わる。軒廻りにはセガイを用いて、深い軒を迫り出している。

東側の縁からも上がれる「座敷」は8畳間で、北壁に床と押入、西面に1間幅の平書院を設ける。この南側には仏壇を置く6畳間があり、床には炉が切ってある。この西側の4畳半の床下に沓脱ぎ石が残り、当初玄関であったことがわかる。また、中廊下を挟んで西側の部屋からは、コンクリート蔵へと続く渡廊下が架かっていた痕跡がある。

屋根の構造は伝統的な和風の小屋組で、2011年の震災時にも瓦が落ちたりずれたりすることがなく、雨漏りの跡もなかった。しかしながら、壁面のたいへん少ない建物であったために、地震の揺れを受けて座敷周囲の柱が数本長押位置で折れ、屋根の重みで傾きが生じた。建物は全体として、高さ方向1mに対して150ミリ程度、南西に大きく傾いていた。

庭側に玄関・台所・風呂が増築されている。玄関北側の通りが当初の側廻りであったことが、南壁に残る出窓からわかる。

建物は、2016年1月に取り壊された。

貸し家



貸し家 通りに面する南面



貸し家 土間一居室境の障子窓具のガラス  
中国風の景色が描かれる



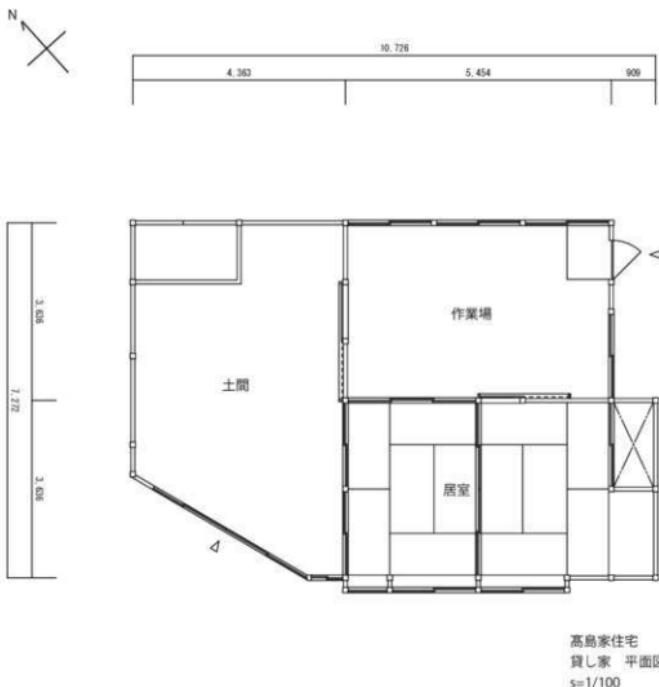
貸し家 北面



貸し家 東から見る庭からの出入口



コンクリート蔵は、貸し家（左）と赤い屋根の隣居（右）と並んでいた。



## 貸し家

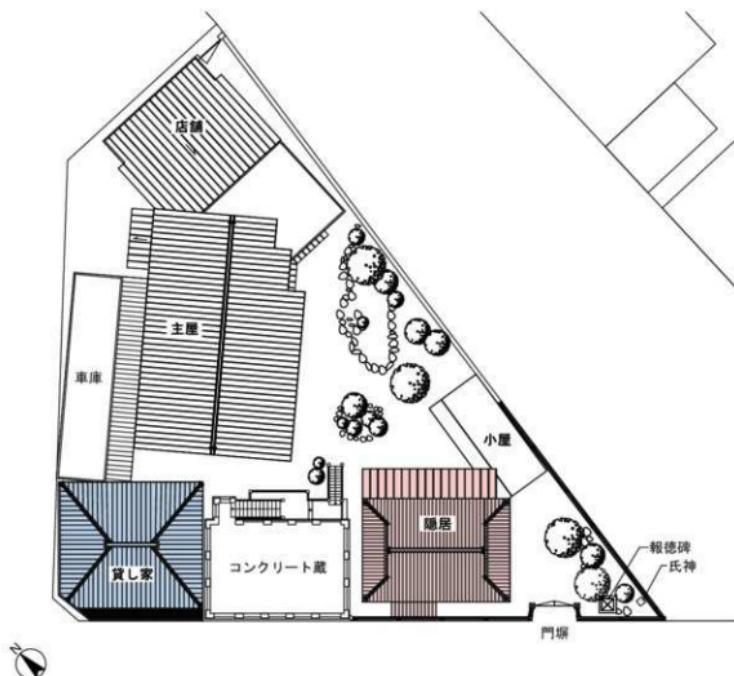
木造、平屋、寄せ棟造、桟瓦葺の建物である。建築年代を示す史料は発見されていないが、建具などの造作類より、コンクリート蔵や煉瓦造の門扉が作られた昭和初期頃の建築であろう。

角から入る空間はモルタル塗の土間となっていて、ここに代々の店子によって駄菓子屋などの店が開かれた。南側には疊敷きの6疊二間の続き間があり、床の間と押入が設けられている。

家業の紙工場がここに置かれたり、寮として下宿人があつたこともある。また、土間では機織りが行われたこともあり、作業場は表具師が使用するために板敷きにされた。小さな建物ながらも、住まいと多様な機能を兼ね備える。

庭への出入口のある西面以外では、窓が広くとられて壁面が少なかったことにより、2011年の地震に被災し、高さ方向1mに対して70ミリ、西に傾いていた。

2016年1月に隠居とともに取り壊された。



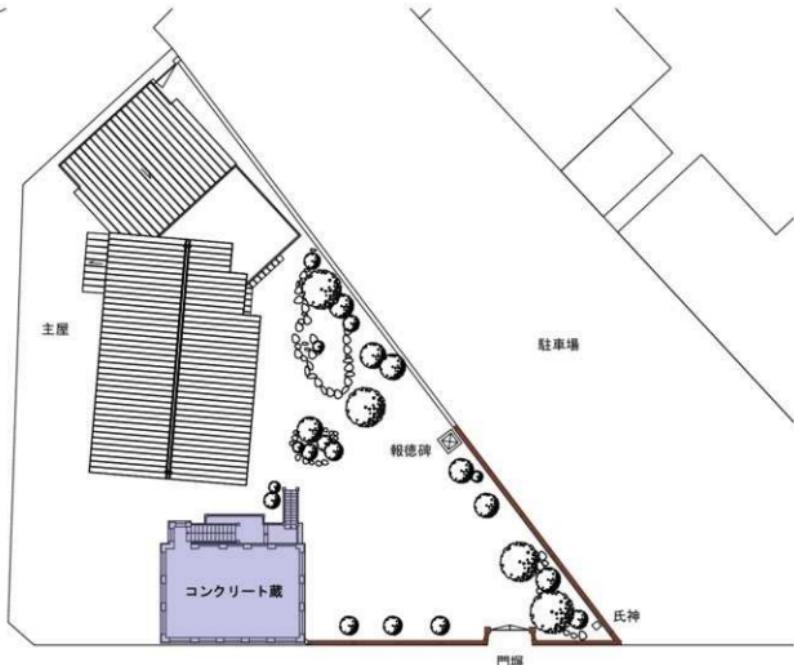
高島家住宅 敷地配置図  
(隠居・貸し屋のあった時)  
S=1/300



当最初市街地を貫いていた小高川は、昭和初期に改修され、上町の西側を通るようになった

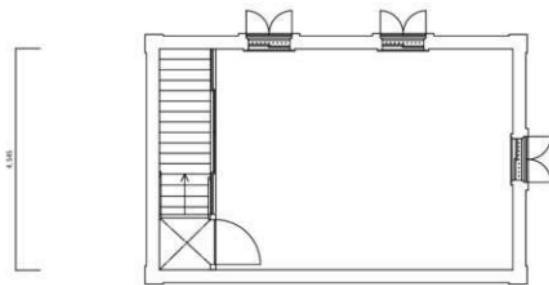


川を渡り、西から上町に入ると、正面突きあたりに高島家の貸し家が見える（写真ではブルーシートで覆われている）



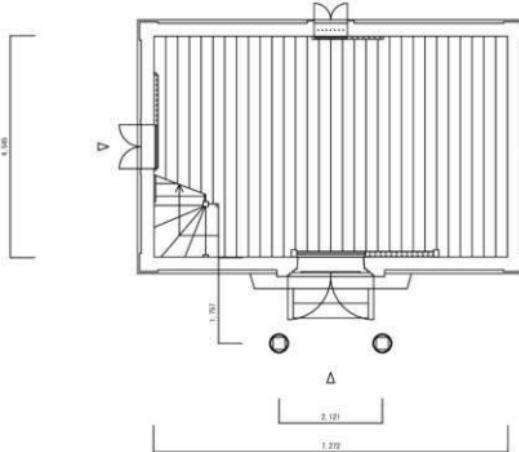
高島家住宅 敷地配置図（現況）

S=1/300



3, 273

2 階



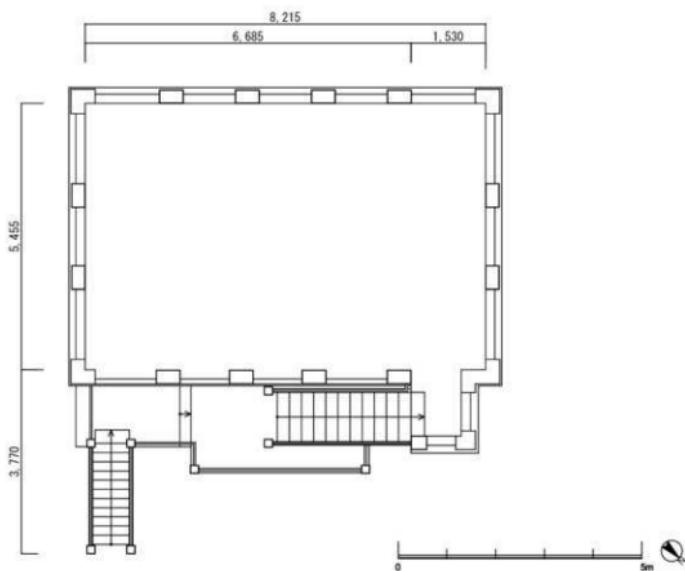
2.321

1 頁



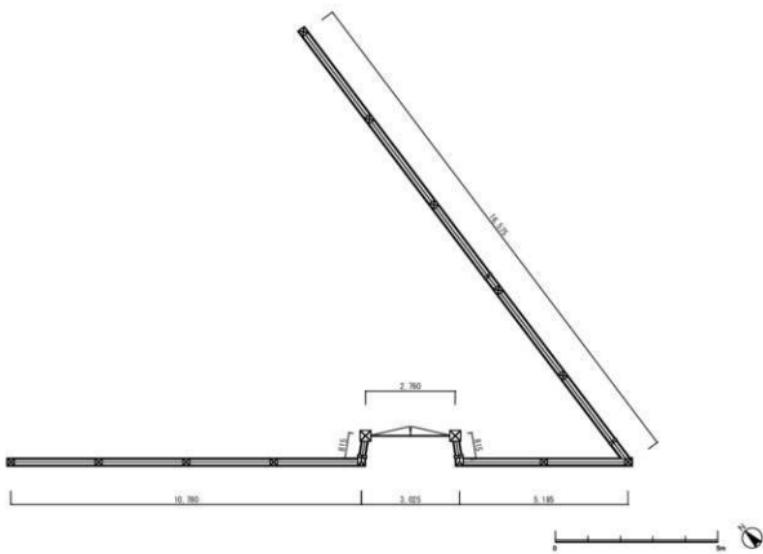
## 高島家住宅コンクリート蔵 平面図

$S=1/100$



屋上・2階テラス

高島家住宅コンクリート蔵 平面図  
S=1/100



高島家住宅門塀 平面図

S=1/150

## 第3章 相馬絹業協同組合

福島県南相馬市小高区閑場1丁目53

はじめてこの建物を見たのは夕暮れ時であった。西からの日射しを正面から受けるコンクリートグリルが光を散りばめ、輝いていた。

小高い町並みには、各時代の繁栄が積み重ねられている。主に近代から現代にいたる建物の姿それぞれが独自の個性を誇っている。中でも相馬絹業協同組合の事務所棟は、市街地を貫く通りから遠くに見えるものの、広い敷地に生産の場をも含めて抱え、小高い歴史を抱っているように見受けられた。

建物を詳細に観察することによって、日本の高度経済成長期の勢いに押されて、この地を象徴するように生み出された建物であることが明らかになった。

### 相馬絹業の背景と建築

#### 1 背景

小高い栄えた養蚕、製糸及び羽二重の絹織物業は、半谷清寿らがこの土地にふさわしい産業を新たに興すために、明治21年（1888）に相馬織物会社を設立したことに始まる。さらに、明治37年（1904）になると半谷一意、半谷清寿、石崎文治が相馬精練株式会社を創設した。当時生糸は、日本が外貨を獲るために主要な輸出品に位置づけられていた。

しかし第一次世界大戦が発生し、その後生糸価格が暴落した。これに対応するように、大正15年（1926）に相馬輸出絹織物工業組合が創立され、昭和3年（1928）には相馬精練株式会社を買収し、原料の協同購入と製品の協同販売が実現された。（注 精練加工における全国の模範組合として宣伝映画



左から事務所棟・検査場・倉庫 すべて同時期の昭和37年（1962）に建設された



完成したばかりの事務所を小高小学校校庭から見る。昭和 39 年 (1964)  
『おだかのまちのすがた』南相馬市 2006 に掲載の写真、高島敬一郎氏所蔵

「伸び行く街」に撮影された。『小高町史』1975)。その後、昭和 26 年 (1951) に相馬絹業協同組合に名称変更している。(p54「小高の織物業」参照)

組合設立当初は、現位置に「練り場」(精練場)を設け、事務所はまちにあった。

今日みる相馬絹業協同組合の施設は、昭和 36 年 (1961) に火災により焼失した翌 37 年に再建されたものである(前身建物は大正末建設か)。組合の営業は、昭和 57 年 (1982) 頃に終業した。

2011 年 3 月の東日本大震災後、組合の建物群は一部損傷の判定を受け、その後半壊として扱われ、今後解体が予定されている。小高市街地の建物が徐々に取り壊され、なおさらこれらの建物の存在が際だつようになっている。

現地より、後述する当初の設計図面が発見されたことにより、建物の計画が明らかになった。この内容と現物の建物を比較することによって、多くの情報が得られた。2017 年に入り、現地において文化財レスキュー事業を実施、建物内に残る史料を回収した。

## 2 ランドマークとしてのモダニズム建築

相馬絹業協同組合事務所は、近代小高の代表的

### 相馬絹業協同組合

構成：事務所、検査場、倉庫、工場  
竣工：昭和 37 年 (1962)  
根拠：設計図面及び  
事務室分電盤設置年月  
設計：山口寛、平木度郎  
施工：時田組 (小高)  
所有者：相馬絹業協同組合

産業を支えた組織を象徴し、南相馬市に残る唯一の「戦後モダニズム」建築である。かつてこの前を流れた小高川の東岸には相馬絹業以外にほとんどなく、中央の流行をまとった建物は、まさに土地の顔であった。

前身の洋風建築の施設を焼失後、建て替えることとなった高度経済成長期の昭和 30 年代後半は、折しも絹産業が合成繊維の発達と流通の変化によって産業形態の転換を余儀なくされていた時期であった。組合事務所の建築に、後に「戦後モダニズム」と呼ばれるようになる当時最先端のかたちを選んだことは、新たな潮流に立ち向かいゆく姿勢を体现するかのようである。現代的な建築の実現によって浜通り地方の未来を担おうとした意気込みが読みとれる。

事務所は、鉄筋コンクリート造、2 階建、古典様式に倣う装飾を廃した柱と梁からなるラーメン構造からなり、正側面の壁をプレキャスト・コンクリート製グリルで飾る。2 階にテラスを廻し、さらに屋上庇を張り出し、水平線を強調する。窓は引違のスチールサッシ、室内仕上げには新材を用い、人造石研ぎ出し仕上げやカラーモルタルで躯体に彩色を施す。

建物の構造と機能を第一におくモダニズムに対して、当時、人間性を取り戻そうと、有機的な造形、モザイクタイルや金工細工の手仕事、あるいは色彩などを取り入れることを試みる建築家も現れた。相馬紡業協同組合事務所の外壁に光のゆらぎをもたらす装置として施されたスクリーンもこの流れに沿う。(注 建築家佐藤武夫はこのような造作を中世ヨーロッパのゴシック建築の詳細になぞらえて「トレーサリー」と呼んだ。)

モダニズム建築の類例として、福島県下には、相馬紡業協同組合事務所の数年前に竣工した、福島県教育会館(昭和31年[1956])がある。この建物は、前川建築設計事務所の建築家からなるミド同人の設計により、担当した三春町出身の大高正人は一連のモダニズムの農協建築により知られる(注 設計者は不明であるが、原町にも円形平面の農協

会館があった)。前川國男は、フランスのル・コルビュジエに師事し、坂倉準三・吉阪隆正と共に上野の国立西洋美術館の実施設計を行った、日本を代表するモダニズム建築家のひとりである。(注 前川作品でのコンクリートブロックスクリーンの使用は、例えば神奈川県立図書館[横浜市、1954]の壁面に見られる。)

各都市では、競ってこのような建物が、先駆的建築家たちによって完成されていった。近代小高の産業を担った組織について、さらに関連史料を収集し考察を重ねることにより、本建築群の土地のランドマークとしての位置づけを明確にしてゆきたい。

### 3 立地と建物

小高の市街地は、常磐線小高駅前から西方に延びる中央通りを中心とし、小高神社参道の妙見通



相馬紡業組合事務所 昭和37年(1962)竣工

りと交差する。さらに先に進むと、今日の小高小学校にいたる学校通りがある。この道は、昭和27年（1952）に埋め立てられるまで旧小高川（昭和初期に改修される前の川筋）が流れていた場所で、この通りの東側に、相馬絹業協同組合は位置する。現事務所他の完成時には、川向かいの小学校校庭に面していた。表通りから奥まではいるが、川の蛇行なりに敷かれた道沿いに立つ2階建ての組合事務所は、他に高い建物のない中、遠くからも視界に入る際だった姿で立ち続ける。

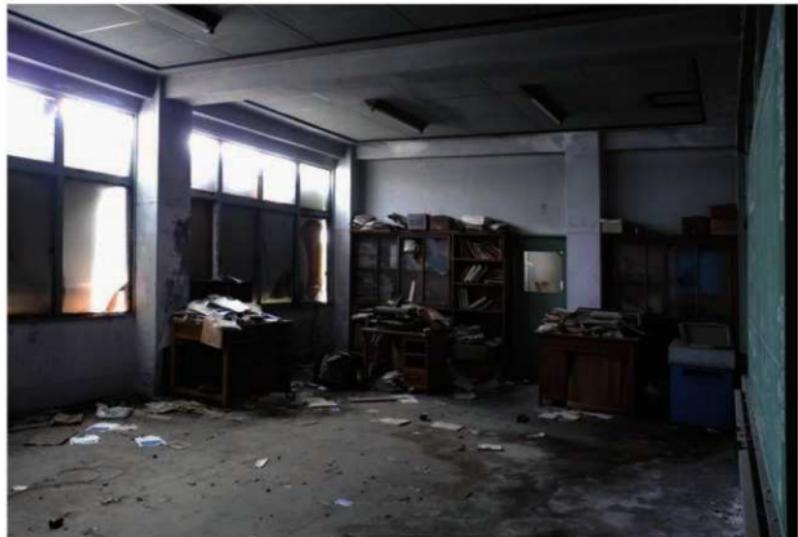
昭和37年（1962）に、北から立ち並ぶ3棟一「事務所」（鉄筋コンクリート造、2階建）「検査場」（鉄骨造、平屋）と「倉庫」（鉄筋コンクリート造、2階建）一が同時期に竣工した。

検査場は、北壁から自然光を取り入れるための外部に斜めに突出する検査窓が特徴的である。内

部は、第2検査室と第3検査室からなる。（設計図には、東面に渡廊下で検査員控室と便所からなる建物が繋がって描かれている。工場の建物内に残るかは未確認。）

設計図に見る倉庫は、「第一期」に2間×3間の建物（倉庫、製品）の片側をコンクリートブロックで積んでおき、「第二期」に東方に1間（倉庫、糸）分延ばし、2間×4間の建物とする計画となっている。しかし、現況の建物では四隅とも梁が斜めに入っており、「第一期」分の2間×3間で完成している。構造上延長の計画は読みとれず、その後完成した工場棟との間に増築する余地はない。図面上の出入口位置とも異なるので、当初設計時より計画変更が行われ、規模が縮小されたことがわかる。倉庫は、静岡より仕入れた生糸を3ヶ月分納めることのできる規模とされた（末永豊明氏談）。

敷地内には、他に奥に撚糸を経糸用に糊付けし



事務室 東を見る 壁中央の戸から台所・宿直室に入る、右端の戸棚内に分電盤。  
什器類や書類が残り、青焼きの設計図面も発見された。

て巻き取ったサイジング工場がある。(この建物は昭和37年の敷地配置図になく、建築時期不明、北東隅にボイラー室)また、事務所の東側には、小さな木造倉庫も立っている。

## 4 事務所の建築

### 4-1 特徴

防火建築の鉄筋コンクリート造の事務所棟は、規則的に柱を配置し、梁を架け渡し、周間に大きな間口部をとる。2階講義室の南面及び東面には、平屋部分の屋上を利用し、テラスを廻す。

正面では、玄関庇を設けた中央間を2階まで通してガラス張りとする。両脇には、プレキャストコンクリート(\*成型した部材を現場に運び、組み立てる。現場打ちではない。)からなる長方形の枠を積み上げて、スクリーンを構成する。屋上の庇を大きく張り出すことで、個々の窓に庇を不要とし、

直方体を強調する姿をかたちづくっている。

一方で、検査場及び倉庫は、事務所棟と比較すると質実剛健な形式をとり、事務所棟を引き立たせている。

### 4-2 各室の仕様

#### □ 平面計画

事務所は、柱間を3.6メートル四方とする四角形を梁間3間(正面)、奥行5間に並べた単純な平面計画からなる。西面する正面から向かって左手に、梁間2間、奥行4間を2階建て、2階にテラスを設ける南側と最東の1間は平屋とする。設計図面は1間3,600ミリで描かれており、メートル法による計画である。

正面中央から突出する玄関から入ると、右手に建物内ただ1箇所の階段室がある。玄関の左手には便所を置く。



事務室 東壁棚内の分電盤に設置年月が記されていた

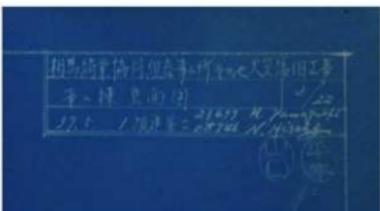


製造 昭和[37]年[10]月 [ ]内陰刻  
仙台 萬 電気工業所

左の分電盤に見る設置年月の銘



調査風景 検査窓面の発見に喜ぶ



右上角の署名より、設計者が判明した。  
山口寛・平木度郎設計  
昭和37年5月

## 小高の絹織物業

小高の絹織物産業は、士族の就産を目的として明治 21 年(1888)、士族 152 名が連名で福島県より 5 千円を借り入れ、小高織物会社を創立したことから始まった。当初は手織機 60 台を設置し、うち 10 台を教場に置き、士族の子女に練習をさせ、他の 50 台は各戸に貸し付けて、自宅での就業と共に工女の養成を図ったという。

この産業の開始は、すでに福島県会議員であつた小高の実業家半谷清寿らが、いち早く明治 17 年(1884)に輸出羽二重の製織に成功し、以後一大生産地として発展を見せようとしていた川俣での機業に影響を受け、士族就産という社会的課題の解決と共に近代産業への転換を志向したものと推察される。

明治 27・28 年(1894・95)の日清戦争前後の好況期には羽二重の価格も上昇し、小高の絹織物産業も発展を見せた。明治 31 年(1898)には、現常磐線が開通し、まさに近代化の波が小高に到来していた。

しかしながら、小高の絹織物業では、精錬(漂白や不純物を取り除く工程)を行っていなかったことから、羽二重の製品化ができず、生羽二重を主に川俣へ販売しており、十分な利益を得るに不利な状況であった。このため、明治 37 年(1904)に半谷清寿らは相馬精錬株式会社を設立し、福井県より精錬技術者を招き、商品化を行うことで、



永石羽二重工場 小高町小高

直接横浜への販売を行うことが可能となり、さらなる産業の活性が図られた。

また、福島県の絹織物業は、明治 30 年代後半から 40 年代にかけて力織機の導入を図り、工場制へ発展していくが、半谷清寿はその中でも力織機への転換を強く主張したとされる。彼は明治 39 年(1906)に東北機業株式会社を設立し、山形から技術者を招き、力織機の導入を促進した。これに習い、小高羽二重株式会社、永石機業工場(永石羽二重工場)などの力織機を導入した工場が次々と建てられ、小高の絹織物業は近代産業として確立していく。この転換は、福島県最大の生産地である川俣を含む伊達地方と比べても早く行われており、半谷らの取り組みが先進的であることが確認できる[表 1]。

表 2 に示す明治 40 年代始めの原町・鹿島・小高の主要産業を見ると、三地区の米、養蚕業などの販売額はほぼ変わらないが、小高では米を上回る絹織物の販売額があり、産業革命に成功した小

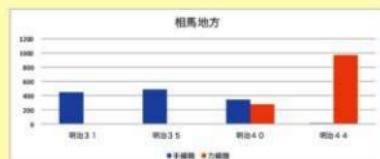
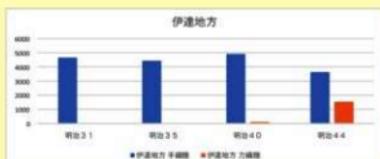


表 1 相馬・伊達地方の力織機・手織機数  
『福島県史 産業経済 2』(福島県 1971)により作成



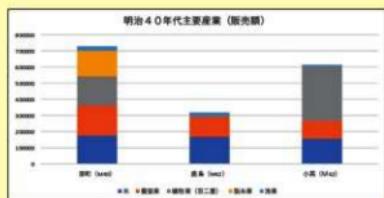


表2 原町・鹿島・小高の主要産業の比較  
『福島県史 政治3』(福島県 1970) 主要産業の変遷により作成

高い隆盛ぶりを知ることができる。

さらに大正2年(1913)に脇曾根発電所の完成により、電動機の利用が促進され、第一次世界大戦による輸出用羽二重の好況もあって、小高の綿織物業はさらなる発展を迎えていく。この好景気を背景に大正7年(1918)には相馬小高神社境内に機織神社が建立されている。

しかし、大正9年(1920)にヨーロッパの生産が回復するにつれ、価格の暴落が起こり、小高の羽二重企業も倒産が相次ぐこととなった。この不況を脱するために、原料の共同購入、製品の共同販売を行う組合組織として、大正15年(1926)「相馬輸出綿織物工業組合」を設立した。このような工業組合組織は全国で4番目のこととされ、この点でも小高の綿織物業が先進的であったともいえよう。

昭和9年(1934)年には福島県輸出羽二重連合

会に加入し、県組織としての共同販売を試み、川俣とも連携して、横浜に石崎文治を販売員として駐在させ、神戸の商店との予約制の取引を行なうなど、安定した販売体制が確保された。

昭和14年(1939)に組合は第百七銀行小高支店跡地を買収し、羽二重産業の不況が継続することなどから、燃糸工場を建設し、時代に応じたジョーゼットなどの製品の生産を行った。しかし、昭和19年(1944)には戦時下の鉄材回収により、設備の多くを失うこととなり、生産は停滞した。

戦後の昭和26年(1951)に組合は「相馬綿業協同組合」と名称を変更し、設備の改善等を図ったが、昭和29年(1954)のアメリカの可燃物織物法の施行により、輸出の制限があり、国内の羽二重産業は大きな打撃を受けた。また続く昭和35年(1960)の貿易自由化等により、ますますの不況となつたことなどから、レーヨン羽二重への転向を図った。このような取り組みは一定の成果が得られ、昭和41年(1966)時点では織物業は小高の中で未だ大きな位置を占めていた[表3]。

しかし、小高の織物業は、この後かつての隆盛を取り戻すことはできなかつた。高度経済成長期を迎えて、国内の織物産業は大きな停滞期に入り、相馬綿業協同組合もその影響にあって昭和52年(1977)頃にはその業務を終えることとなつた。

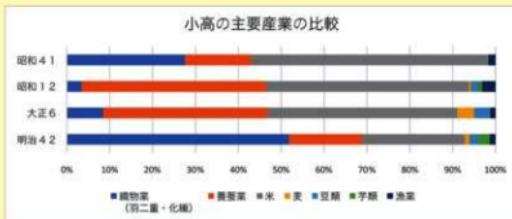
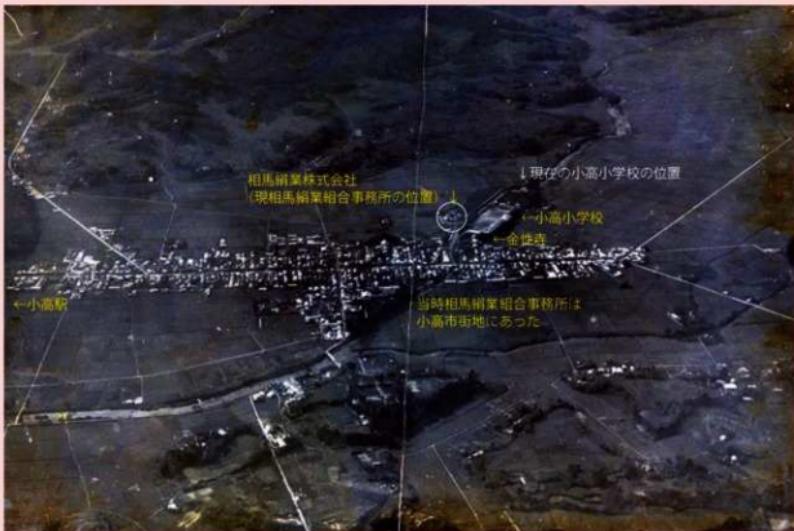


表3 小高の主要産業の比較(販売額)  
『福島県史 政治3』(福島県 1970) 主要産業の変遷により作成



小高市街地を上空からみる。金性寺の前を通っている小高川は、昭和初期に改修され、今日は道路となっている。  
(第二次世界大戦前の航空写真、高橋紀子氏提供)



相馬綿業組合 上空からみる。(第二次世界大戦前の航空写真、部分。高橋紀子氏提供)



相馬絹業株式会社 現事務所の位置に洋館の「相馬絹業株式会社」が立っていた。下図にも写り、建物の詳細が見える。  
昭和 24 年頃。(『おだかのまちのすがた』南相馬市 2006 より 斎藤良介氏所蔵)



改修前的小高川を挟んで、小学校校庭から見えた相馬絹業株式会社。画面右には、検査場の斜め上方に張り出す採光用天窓が見える。敷地角から校門前に橋がかかる。(小高尋常高等小学校 昭和 9 年卒業写真帳より、部分。高橋紀子氏提供)

1階では中央間を2分し、南寄りに1.8メートル幅の中廊下を東西方向に通し、北側に事務室、南側に手前から図書室と第1検査室を配する。廊下突き当たりの平屋に用務員室・宿直室・湯沸かし室・浴室の裏方の部屋を設ける。

2階は、大きな1室とする。階段を上がった先の踊り場を「談話室」として利用できるように広くとっている。このために、階段室を南側に1.1メートル突出させ、階段下を物置とする。これは階段の上がり口が1階中廊下に突出することを避けた結果であろう。

2階ではテラスを南側・東側に造り、図面ではそれぞれの用途を「運動場」及び「屋外談話及びゼミナールスペース」とする。テラス東端には鉄製の外階段を設け、地上に降りることができる。

## □ 1階

### 玄関

建具は両開きガラス入り鉄扉。土間を設けて下駄箱を置き、建物内では沓脱ぎをしたことがわかる。廊下との間に木製格子の袖壁を設ける。

### 廊下

幅1.8メートルの廊下が、背骨のように建物を東西に貫く。廊下床には、台所と風呂場を除く各室と共に暖房用ピットが設けられている。

### 事務室

幅1間半、奥行3間を越える事務室は1階の最も大きな部屋である。廊下側に2箇所両開き戸（図面では引き戸とされる）の出入口、間仕切り壁には引違窓と欄間窓を建て込む。西壁には床の間が設けられている。（天井仕上げを見ると床の間として造られたことがわかる。一方、設計図には床を2つに分けて床脇を設ける形式で描かれているが、少なくとも天井まで達する高さの造作の痕跡は認められず、設けられなかったようであ

る。）側廻りの北面の窓は、スチールサッシに滑ガラス。

事務室には、3台の金庫が残されている。このうち2台にはそれぞれ「大日本東京長山製」、「株式会社 東京清水製作所 東京府南千住町三輪」と右から左へ横書きの鋳造された銘板が取り付く。前身建物で使用していた金庫が焼け残ったものであろう。これらは、金庫本体の製造方法の違いからも（前者は溶接であるのに対し、後者は折り曲げ式で造られていることから比較的新しい）年代差が読みとれる。残りの1台には「東京建鉄工業製」と左からの文字が見られる。組合の発展とともに、増設されてきた経緯が窺える。

### 図書室

廊下右手手前の部屋は図書室である。東壁には飾り棚が埋め込まれている。壁はベニヤ下地に上下異なる2種類の壁紙仕上げが残る。（図面中の仕様書によると、壁上方はブロスター仕上げ、下方はベニヤ下地に布貼りとある。）巾木はこの部屋のみ木製とし、他の部屋の簡素な内装と比較して居室らしい仕上げとされる。

### 通用口

図書室と検査室との間に通用口があり、両開きの鉄扉から廊下を経て各室に至る。この位置は、工場や倉庫に入りするのに都合よい。壁には、機屋名称が屋号で印された伝票入れが残る。

### 第1検査室

事務所棟で糸の分配をしたことで、図面上では検査室とされるが、この部屋は福島県の役人の部屋であったという（末永豊明氏談）。床はPタイル仕上げ。

### 台所・湯沸室

東壁に勝手口を設け、引違鉄扉を建て込む。上方に窓のある風呂場壁に沿って、人造石研ぎ出しの流しを配置する。この手前の床には、内部モル (p64へ続く)

事務所 外観



正面玄関（西面）



2階 南側テラス



外壁スクリーン詳細

幅515ミリ×高さ385ミリのプレキャストコンクリートブロック  
15ミリの自地で積み、裏面を鉄筋で支持



背面（東面）から見る 鉄階段でテラスへ



背面 平屋に台所・風呂場・宿直室 屋根にテラスが続く

事務所 1階



玄関 叩きに下駄箱、沓脱ぎをしていた



玄関ホール



廊下 東を見る 左が事務室、右に図書室、最奥に宿直室



廊下 西 (玄関)を見る 右が事務室



廊下 新建材からなる天井仕上げ



廊下 配線溝への改め口



木部による吊り天井 (写真は事務室)



事務室の床下にも動力配管があった



事務室 廊下境間仕切り壁



事務室 西を見る

事務所 1階事務室 金庫



3台の金庫が並び、画面左から 金庫1 金庫2 金庫3 と呼ぶこととする。



金庫奥の壁は床の間として天井を造る  
壁には額を掛けた跡がある



金庫1 溶接式



金庫1銘 大日本東京長山製

年代の異なる金庫3台より、組合組織の発展がうかがえる。いずれも東京製で、構造にも違いがあらわしている。金庫1と2は第二次世界大戦前の、現建物に建て替えられる前から使用されたものと思われる。



金庫2銘 株式会社 東京清水製作所 東京都南千住町三輪



金庫2 折り曲げ式  
(金庫1より新しい形式)



金庫3



金庫3銘 東京建鉄工業製  
(左から読む)



図書室 当初から壁に飾り棚、壁紙仕上げ



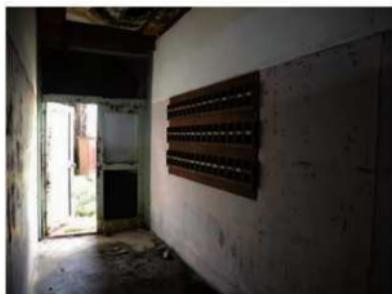
検査室 図書室の先にある



台所 人造石研ぎ出しの流し、正面奥は風呂場



宿直室 続き間の和室



通用口に至る廊下



機屋ごとに区画された伝票入れが残る。それぞれの屋号を印す

タル塗の床下収納がある(図面には「炉」とある)。ガスコンロは据え置き。

#### 風呂場

台所の北隅に風呂場を設ける。東側の腰廻りを煉瓦積みの耐火構造とし、台所内のコンクリート叩き土間に湯沸かし器を置く。台所から入る廊下突き当たりには洗面器があった(現在は欠損)。

#### 宿直室

廊下突き当たりの腰付ガラス戸の引き戸の先に宿直室がある。コンクリート造の躯体に木製柱を埋め込み、棹縁を配した船底天井とする畳敷きの和室である。2部屋からなり、両者の間仕切りは欄間と襖からなる。奥の部屋には床と押し入れがある。台所との間仕切りは、廊下側同様の腰付ガラス引き戸とする。

#### 便所玄関脇

小便器2基、大便所2室と洗面器。詳細については2階の便所参照。

#### 階段室

正面玄関を入って右手に階段室がある。人造石研ぎ出し仕上げの階段には、色鮮やかな仕上げが施されている。踊り場を経て、2階に上がる。手摺り、手摺子とともに鉄製。階段踊り場、2階踊り場には、鉄管をジグザグ状に曲げた手摺り子のある手摺りが取り付く。

2階の踊り場は広くとられ、図面には「休憩談話室」と記載されている。踊り場の正面側を透明なガラス張りとし、通り側から建物内の様子をうかがえる唯一の窓である。(他の部屋について、1階はすべて曇りガラス、2階ではテラス側のみ透明ガラス、通り側は曇りガラス。)

#### □ 2階

##### ホール(講義室)

2対両開き戸から入る大部屋は「職業指導講義

室」、正面(東側)1間分を「役員会議室」として設計されている。東壁には装飾的な布張りの屏風型造作を造り付け、部屋に正面性を持たせる。図面に見るよう2室に間仕切られた跡は柱面にも見られず、そのようになっていたこともないという(末永豊明氏談)。

窓は、テラスに面する南面に透明ガラス、北面は摺ガラスを入れ、外から室内が見えないようになっている。掲き出し窓にはスチールサッシを建て込む。

#### 便所・湯沸室

階段踊り場に面して、便所・湯沸室がある。

便所には、小便器3基と洗面器。壁下方、床ともタイル張り。床は格子模様に細かい「モザイクタイル」、小便器廻りの床は玉石型タイル貼り。色は薄桃色、灰緑、炭色。小便器の商標に「FUJII SEITO」、洗面器は「TOYO TOKI」(当初材、現TOTO)。小便器袖壁は、暗色の人造石研ぎ出し。

湯沸室には、人造石研ぎ出しの流しと食器棚があり、東壁の片引き戸から講義室に出入りできる。

#### テラス

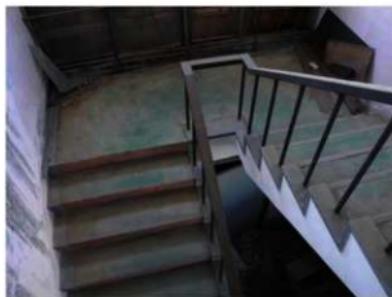
南面、東面のテラスはそれぞれ屋外談話及ゼミナールスペース及び運動場に充てる。講義室の掲き出し窓から出入りする。階段踊り場からもテラスに出られ、また東面には鉄製外階段が取り付き、地上に降りられる。

#### 4-3 仕上げ

##### ・透かしブロックからなる外壁

建物に日射しが当たると透かしブロックからなるスクリーンに陰影が生じ、また幾何学的な模様を奥の壁面に投影することで、比較的単純なかたちの建物にも、複雑な表情が醸し出される。

プレキャストコンクリートのスクリーンは、「ホウロウ ブロック」(注 hollow=空洞の意)からなり、(p69へ続く)



踏面と踊り場は緑色



踊り場手摺り 階段手摺り同様鉄製



階段詳細



蹴上げには赤色を施す



玄間を入れると色鮮やかな階段が目に入る  
踊り場下は倉庫

事務所 2階踊り場



テラス 西から見る



2階 階段踊り場 画面左の開き戸からテラスに出られる



階段踊り場は「休憩談話室」



踊り場に面する便所 当初のモザイクタイルが残る



踊り場まわりは淡い色のペイント塗装仕上げ



講義室見返し 画面左の掃き出し窓からテラスに出る



「屋外談話及びゼミナールスペース」に面する戸には透明ガラス



講義室 奥 1 間が「役員会議室」 設計図に描かれた間仕切りの痕跡は見られず、聞き取りでも間仕切りはなかったという



講義室 北壁、スチールサッシの窓には曇りガラス

ブロックは幅 515 ミリ×高さ 385 ミリ、周囲に 15 ミリ幅の目地をとり、幅 530 ミリ×高さ 400 ミリを壁面構成の単位とする。中央に配された穴では内側を周囲 5 ミリずつ小さくし、日本建築における格子のような操作がされている。ちょうど 2 階庇の下にブロックの割付が納まるように、立面が計画されている。スクリーンに構造上の役割はなく、壁から浮かした位置に鉄筋で補強しながら積み上げる。

このようなスクリーンは、視線や空気が内外を行き来することを想定して用いられるのであるが、相馬絹業協同組合の事務所では、スクリーンが取り付く壁面の窓開口部は小さく、内外の関係性よりも、外観の装飾として用いられている。モルタル色のブロックに対し、内側の壁面には肌色の塗装が施されて、対比をなす。

#### ・色彩

室内の壁は上方を白プラスター塗、下方を薄桃色（1 階）あるいは薄水色（2 階講義室）とし、床際の巾木を同系色の濃い色にする。木部造作は灰緑色で塗る。また、天井は、中央部を白色、縁を灰緑のペンキ塗とし、周囲の帯を茶色（退色した色か）のクロス張りとする。

このように比較的落ち着いた色合いの室内とは対照的に、特に階段室廻りでは人造石研ぎ出し仕上げに色彩を取り入れ、鮮やかに仕上げる。踏面と踊り場を緑、両脇を暗色の人造石研ぎ出し仕上げ、蹴上げを赤、側面を薄桃色とし、鮮やかである。

玄関土間や階段室、廊下などの床面にはカラークリートで色が施されている。（注 カラークリートとは、顔料入りの鉱物系材料をコンクリート打設時に表面に散布し、軽体と一体化する強固な仕上げ。）

2 階講義室の既存床仕上げの下に、当初材と思われる床仕上げ材の断片が確認され、鮮やかな赤

相馬絹業の時を刻み続けた  
EIKOSHA（英工舎）の時計。  
階段下に保管されていた



色である。

#### ・建築材料

事務所棟では、当初から新材多用され、照明器具も蛍光灯であった。ほとんどの部屋には、図面に記載されている仕上げが、床材を除いて残る。

壁や天井に、新材のタイガーボード（石膏ボード）、タイガートーン（吸音用穴開き石膏ボード）を使用。（注 製品製造者吉野石膏のインターネット上のサイトによると、アスペクトが使用されたのは、昭和 40 年代末から 60 年代初期にかけての耐火製品においてであり、相馬絹業協同組合事務所の建設年代は該当しない。）さらに、天井はクロス張り、プラスター塗、ゾラコート仕上げ（吹付塗装）、和室では天井板に杉ベニヤ。

#### 4-4 現況

発見された設計図面と比較することで、床材のように後年更新されている範囲も一部あるものの、現在もほとんど当初の仕上げを残していることが判明した。建築時の仕様のわかる書類が現存することから、旧状を知ることができる。平面についての変更はなく、側回りの全スチールサッシ建具や室内の木製建具類も現存する。（但し、宿

直室の襖や障子建具は雨漏りにより破損が大きい。) 天井仕上げや照明器具(蛍光灯)も残る。

2011年の東日本大震災時の揺れを受けて、事務所の南面及び東面に回されたテラスの建物本体との取り合いの部分で軸体に破損が生じ、以来雨水の浸入が見られるところがある。また、雨漏りにより宿直室まわりの木部の腐朽が進んでいる。

## 5 設計図と設計者

### 5-1 設計図の発見

事務所棟の事務室に設計時の青焼き図面「相馬綱業協同組合事務所その他火災復旧工事」22枚綴りが一式揃いで残されていた(但し、一般図のうち1階平面図が切り取られ、欠損。)。図面右上角枠内に事業名と共に記された日付は昭和37年5月、事務室東壁書棚内に埋め込まれた分電盤に記載されている設置時は、昭和37年10月である。すなわち、設計時から計画通りに組合の一連の施設は完成したことがわかる。図面には一部現況と異なる内容も確認でき、実施と異なる点もある。

### 5-2 設計者

設計図面に設計事務所の名前はなかったものの、「H.Yamaguchi(印 山口)」と「N.Hiraki(印 平木)」の名前が記載されていた。図面には設計者として、一級建築士 23477 H. Yamaguchi 及び

08746 N.Hirakiの署名と枠外に山口、平木とそれぞれの捺印が見られる。

この名前を頼りに、福島県下の設計事務所に当たってみたところ、株式会社 平木建築設計事務所(福島市)の平木和夫会長から話しを伺うことができた。会長は、「N.Hiraki」の署名を見る亡弟平木度郎氏の事務所を継ぎ、2015年に引退したとのことである。度郎氏は、昭和37年当時、福島県教育府財務課に勤務していたので、県の役所で受けた仕事だったと推測される。

また、「H.Yamaguchi」(印 山口)の署名については、株式会社 山口建築設計事務所(郡山市)の代表者山口寛氏であることを知らされた。(以上、2016年4月18日 電話での聞き取りによる)

このようにして、ふたりの設計者山口寛氏及び平木度郎氏が判明した。

使われなくなってから久しく、人の出入りも途絶えた、小高い人々にとっては日常の光景に溶け込んでいた建物も、このように改めてその歴史と特徴に注目することで、ほんの一部分ではあるが残した足跡の先進性と大きさを明らかにすることができた。ここで見出された、建物を読み解くための「繭の糸口」から、さらに多くを引き出せればと願う。



小高駅から続く通りから見る、相馬綱業協同組合事務所遠景(位置を↓で示す)

倉庫・検査場・工場



倉庫 南西から見る



検査場 西面



検査場 北面の明かり取りのもとで製品検査をした。  
前身の建物にも同様の天窓があった。(p57 古写真参照)



工場 南から見る



工場 機器類が残る



工場 蒸気ボイラー

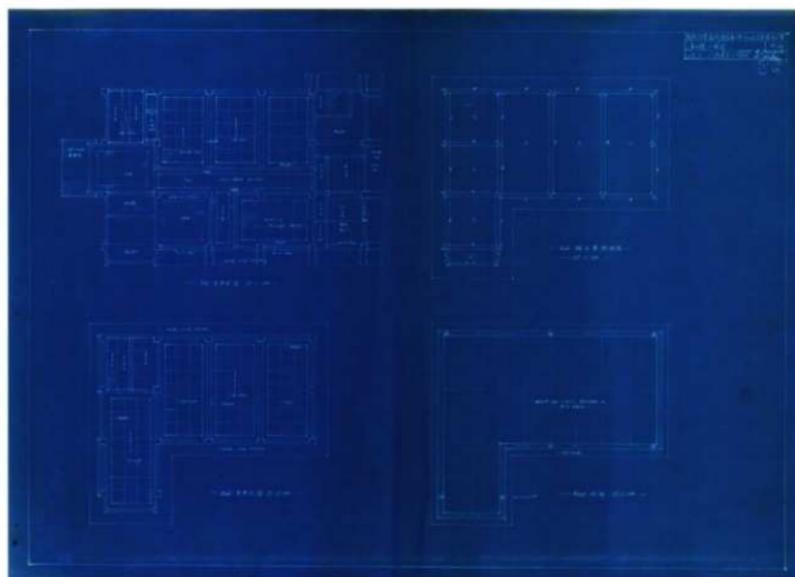
「相馬絹業協同組合事務所その他火災復旧工事」 昭和37年5月付

青焼き図面 全22枚揃い(但し、図面2中の1階平面図は切り取られ、欠損)

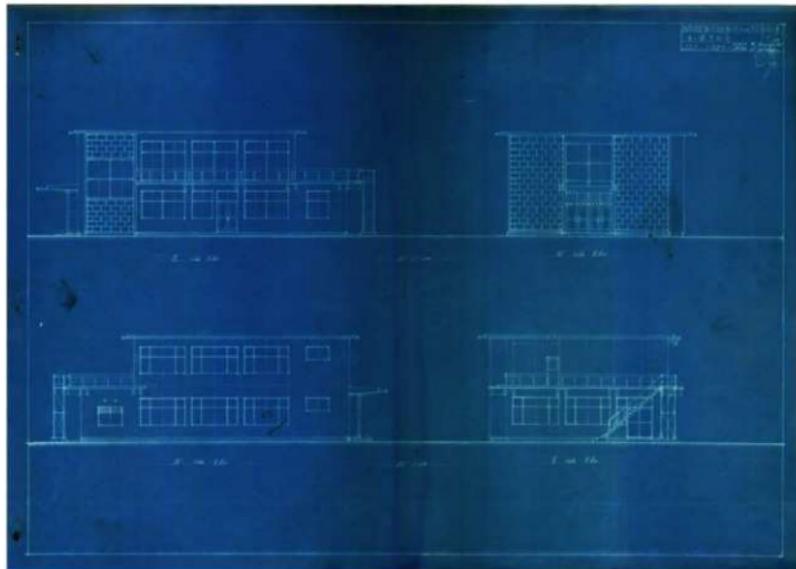
文化財課にてデジタル化して、原本とともに保管している。

#### 図面一覧

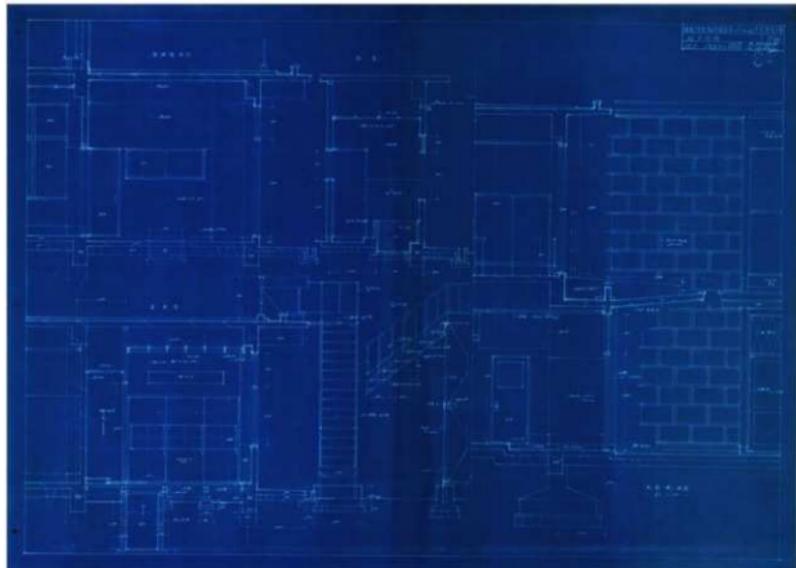
- |                   |                   |
|-------------------|-------------------|
| 1 配置図             | 12 検査棟一般図         |
| 2 事務棟一般図          | 13 検査棟立面及検査マド詳細   |
| 3 事務棟立面図          | 14 検査棟矩計          |
| 4 事務棟一般図          | 15 検査棟鉄骨詳細        |
| 5 矩計詳細            | 16 倉庫棟一般図         |
| 6 矩計詳細            | 17 倉庫棟矩計          |
| 7 矩計詳細            | 18 倉庫棟配筋図及立面図     |
| 8 ラーメン配筋図         | 19 倉庫ラーメン配筋図      |
| 9 ラーメン配筋図         | 20 事務棟電灯配線図       |
| 10 スラブ・ベース配筋断面リスト | 21 事務棟給排水検査棟電灯配線図 |
| 11 階段配筋事務所内部仕上表   | 22 倉庫棟電灯外線引込図     |



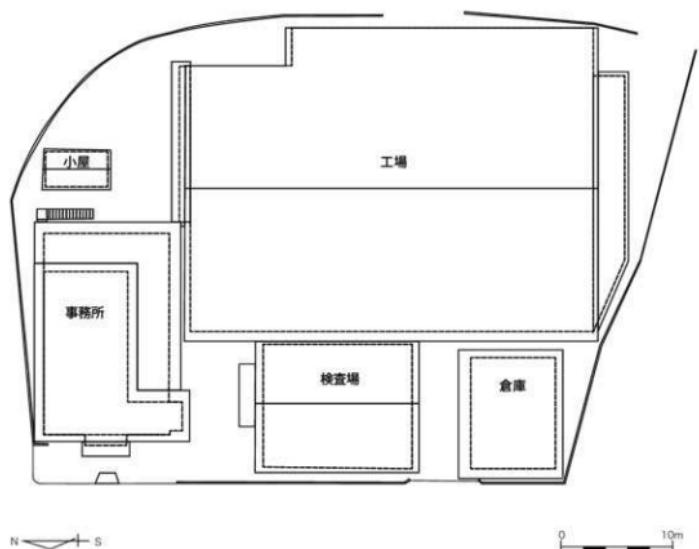
2階及び屋根一般図



立面図

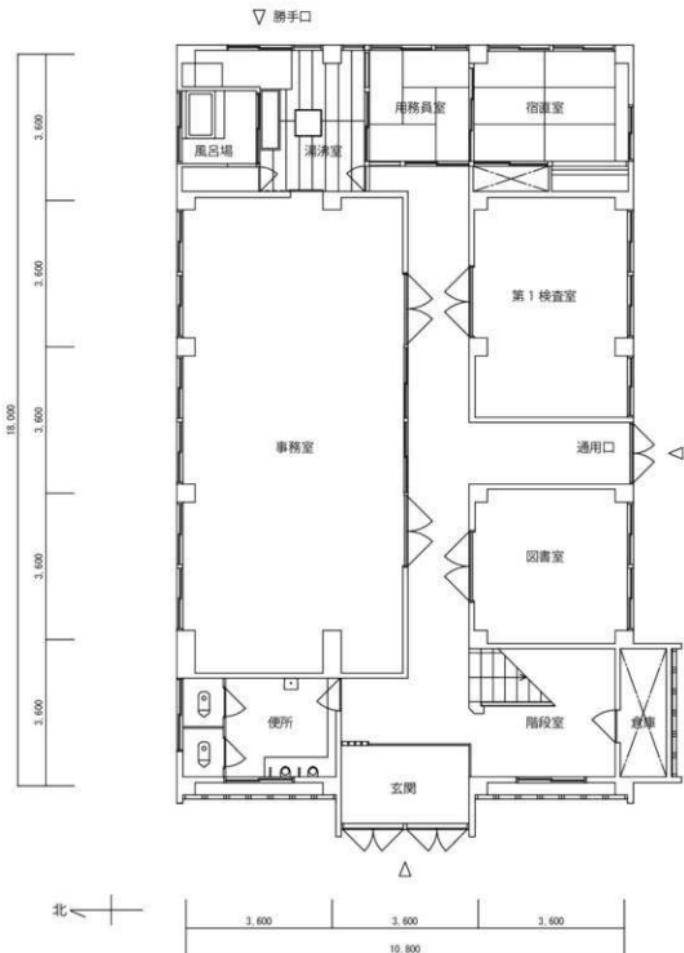


矩計詳細図

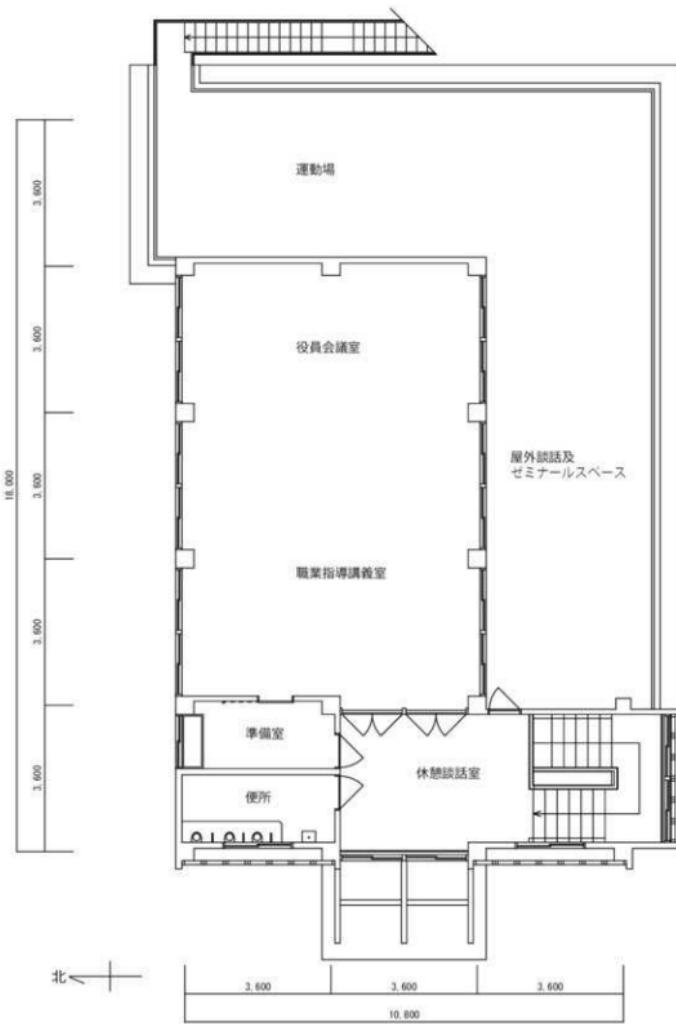


※ 破線で建物平面の輪郭を示す。

相馬網業協同組合  
屋根伏図・敷地配置図



相馬絹業協同組合 事務所  
1階平面図 S=1/120



相馬網業協同組合 事務所  
2階平面図 S=1/120

## 実施した建物調査 2012-2016

・今回調査主体となったのは、朝日座を楽しむ会、南相馬市教育委員会文化財課 [以下、文化財課]、

南相馬市文化遺産を活かした復興まちづくり実行委員会 [以下、実行委員会] である。

・所在地には所在する南相馬市の区を示す。対象所在地が、市内複数区に及ぶ場合には「市」と表記。

・調査者の姓名は例言に示す。

年	月日	対象	所在地	主体	調査者
2012	8月24日	朝日座	原町	朝日座を楽しむ会	金出、和田
	11月17日	朝日座	原町	朝日座を楽しむ会	金出、和田
	11月18日	朝日座	原町	朝日座を楽しむ会	金出、小林(直)、安富、和田
	12月15日	朝日座	原町	朝日座を楽しむ会	金出、道家、和田
	12月16日	朝日座	原町	朝日座を楽しむ会	金出、和田
2013	2月5日	原町区	原町	朝日座を楽しむ会	小畠、和田
	7月2日	大谷家	鹿島	朝日座を楽しむ会	金出、和田
2014	4月5日	大谷家	鹿島	実行委員会	菊地、八島、和田
	5月28日	大谷家	鹿島	実行委員会	菊地、三浦(華)
	6月20日	南相馬市	市	実行委員会	道家、和田
	6月21日	南相馬市	市	実行委員会	道家、和田
	6月22日	南相馬市	市	実行委員会	道家、和田
	6月27日	大谷家	鹿島	菊地、三浦(華)	同左
	6月28日	南相馬市	市	実行委員会	道家、安富、和田
	6月29日	南相馬市	市	実行委員会	道家、安富、和田
	7月27日	原町区	原町	実行委員会	小畠、和田
	8月9日	朝日座	原町	実行委員会	小畠、小林(和)、高平、和田
	10月18日	大谷家	鹿島	実行委員会	金出、道家、和田
	10月19日	大谷家	鹿島	実行委員会	金出、道家、和田
	11月1日	但野農機具	原町	実行委員会	道家、和田
	11月2日	鈴木刃物店	原町	実行委員会	道家、和田
2015	11月8日	小林眼科医院	原町	実行委員会	金出、道家、和田
	11月9日	小林眼科医院	原町	実行委員会	金出、道家、和田
	11月23日	青田家	原町	実行委員会	金出、和田
	11月24日	青田家	原町	実行委員会	金出、和田
	2月12日	高島家	小高	実行委員会	金出、和田
	2月13日	青田家	原町	実行委員会	金出、和田
	2月14日	高島家	小高	実行委員会	金出、和田
2016	5月24日	大谷家	鹿島	実行委員会	金出、三浦(晶)、和田
	5月29日	小林眼科医院	原町	文化財課	金出、和田
	5月30日	高島家	小高	文化財課	金出、和田

年	月日	対象	所在地	主体	調査者
2015	5月31日	小林眼科医院	原町	文化財課	金出、和田
	7月3日	小林眼科医院	原町	実行委員会	金出、和田
	7月4日	小高区	小高	実行委員会	大野、金出、安富、和田
	8月3日	相馬小高神社	小高	実行委員会	金出、菊池、三浦(華)、和田
	8月4日	相馬網栄協同組合	小高	実行委員会	金出、和田
	9月12日	綿屋興服店	小高	文化財課	大野、金出、和田
	9月13日	綿屋興服店	小高	文化財課	大野、金出、和田
	10月3日	高島家	小高	実行委員会	金出、和田
	10月4日	小高区	小高	実行委員会	金出、安富、和田
	10月17日	高島家	小高	実行委員会	金出、刈田、和田
2016	11月1日	原町区	原町	実行委員会	金出、小松、和田
	11月3日	南相馬市	市	実行委員会	小林(直)、和田
	11月4日	南相馬市	市	実行委員会	小林(直)、和田
	2月12日	柴田家	小高	実行委員会	大野、和田
	2月19日	半谷家（小高銀砂工場）	小高	文化財課	大野、和田
	2月20日	木幡家	小高	文化財課	金出、和田
	2月21日	半谷家（小高銀砂工場）	小高	文化財課	金出、和田
	4月14日	相馬網栄協同組合	小高	文化財課	金出、和田
	4月15日	相馬網栄協同組合	小高	文化財課	金出、和田
	6月11日	大谷家	鹿島	文化財課	金出、和田
	6月12日	高島家	小高	文化財課	金出、和田
	6月13日	大谷家	鹿島	文化財課	金出、和田
	6月13日	天野家	小高	文化財課	金出、和田
	6月28日	天野家	小高	文化財課	金出、和田
	6月29日	天野家	小高	文化財課	金出、和田
	8月30日	大悲山石仏教会館	小高	文化財課	金出、和田
	11月26日	鎌木家（林業局）	小高	文化財課	大野、金出、和田



火の祭の花火と高島家コンクリート蔵 2016年夏

#### 参考文献

- 若松太郎編集『開館 50 周年記念 わたしと朝日座 1921—1971』1971 年 11 月 3 日 朝日座  
「小高町史」 小高町 1975  
布川謙幸・二上英朗「朝日座全記録 1923 ~ 2003」 2003  
「おだかの人物」(おだかの歴史 特別編 1) 南相馬市 2006  
「おだかの歴史入門」(おだかの歴史 特別編 3) 南相馬市 2006  
「写真集 おだかまちのすがた」(おだかの歴史 特別編 2) 南相馬市 2006  
「原町市史 第 11 卷」(特別編IV 旧町村史) 南相馬市 2008  
「おだかまちの現代資料～南相馬市誕生までの三〇年～」(おだかの歴史 特別編 6) 南相馬市 2016

南相馬市文化財調査報告書 第 1 集

## 南相馬市の歴史ある建物 1

2012-2016

発行 平成 29 年 3 月 31 日

福島県南相馬市教育委員会

編集 南相馬市教育委員会文化財課文化財係  
福島県南相馬市原町区本陣前 1-70  
電話 0244-24-5284

印刷 愛原印刷所  
福島県南相馬市原町区栄町 1-8  
電話 0244-23-2068

南相馬市文化財調査報告書 第1集  
南相馬市の歴史ある建物 1  
2012-2016



南相馬市教育委員会  
2017年3月